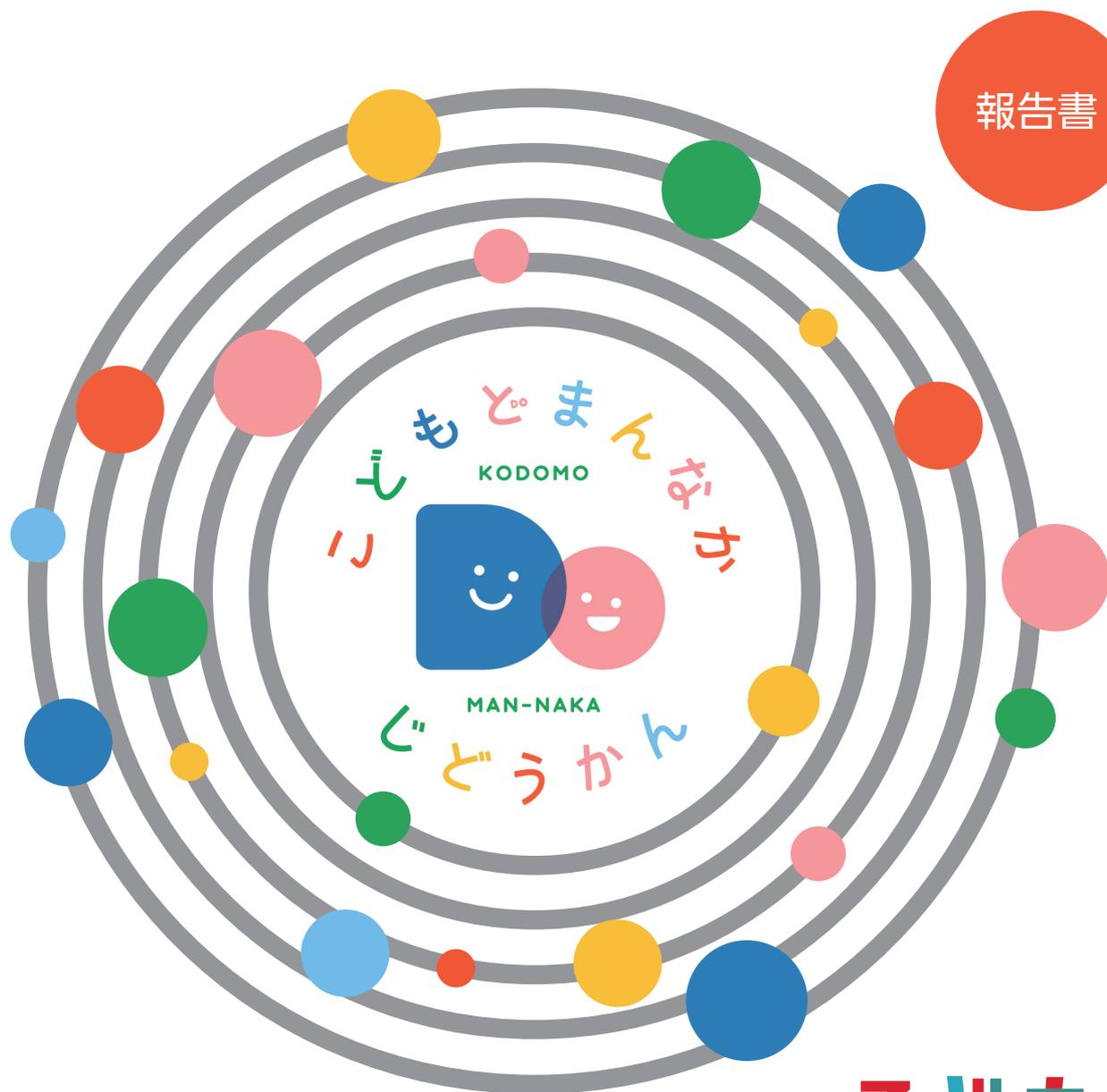


第18回全国児童館・児童クラブ大会

今までも これからも こども Do まんなか

報告書

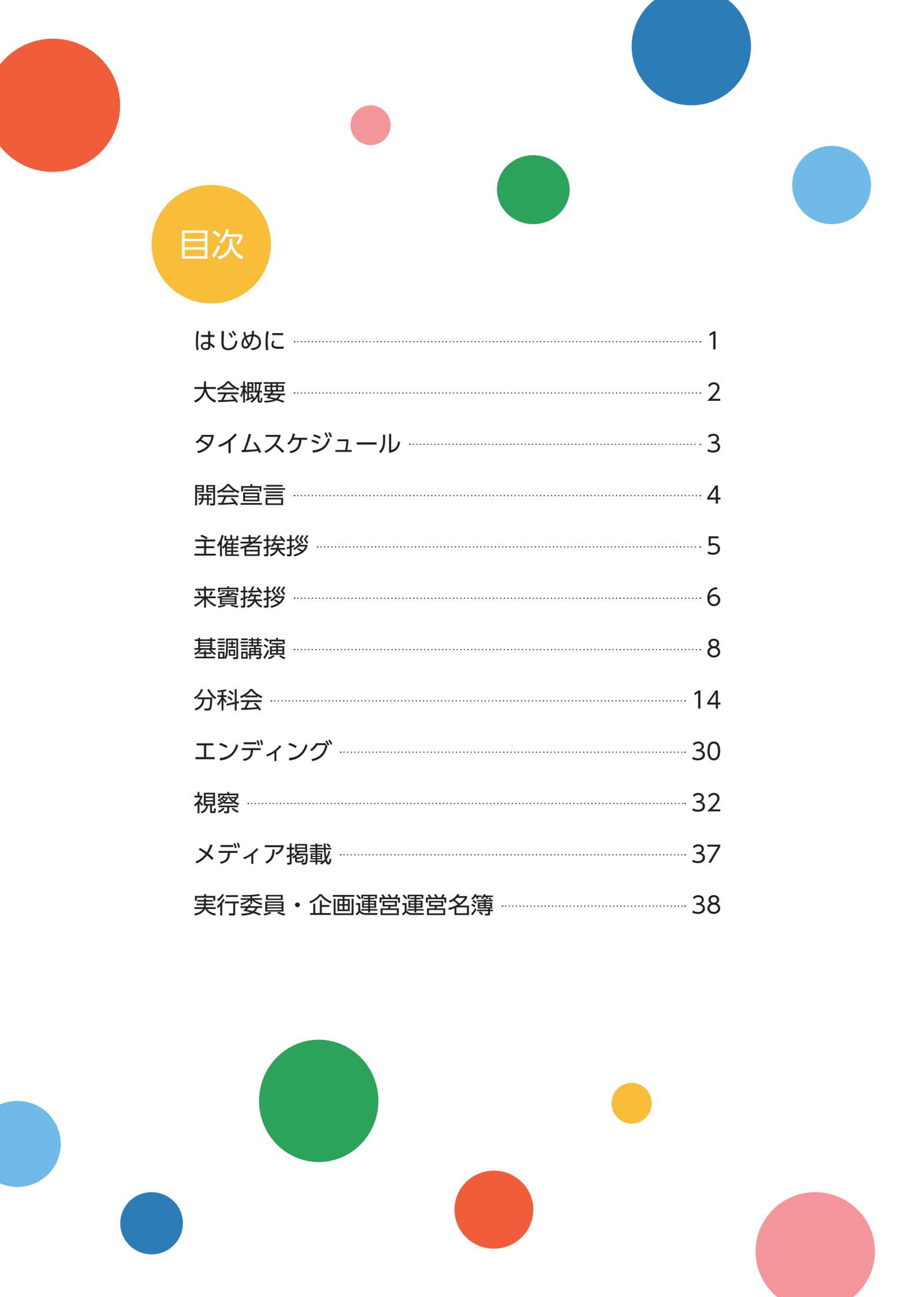


2023

11/25 Saturday

こども
まんなか

主催 全国児童厚生員研究協議会 全国児童館連絡協議会 一般財団法人児童健全育成推進財団
主管 第18回 全国児童館・児童クラブ大会実行委員会
後援 こども家庭庁 社会福祉法人全国社会福祉協議会 児童厚生員養成課程連絡協議会
民間児童館ネットワーク 全国地域活動連絡協議会



目次

はじめに	1
大会概要	2
タイムスケジュール	3
開会宣言	4
主催者挨拶	5
来賓挨拶	6
基調講演	8
分科会	14
エンディング	30
視察	32
メディア掲載	37
実行委員・企画運営運営名簿	38



はじめに

集まること、つながることを大切にしながら、これまで全国各地をバトンでつないできた児童館・児童クラブ全国大会でしたが、新型コロナウイルス感染症のために、そのバトンを一時預かることになり、再開の時期を待っていました。第18回大会の計画段階では、まだ大勢の参集が懸念される中でしたが、リスクを最小限に抑え、最大限の可能性を求め、大会初の全国7か所をつないでの開催としました。

令和5年4月に「こども家庭庁」が発足し、児童館・児童クラブの役割が改めて見直されるこの時期に、加藤鮎子こども政策担当大臣と塩崎彰久厚生労働大臣政務官をお迎えし、全国各地から多くの方に参加いただき開催できましたこと、大変うれしく思っております。

また今大会は、「こどもの居場所」「こどもの声」を軸に、8つの分科会それぞれの手法で議論を交わしました。分科会の企画運営は、全国児童厚生員研究協議会（全児研）の有志が行い、参加者とともに、この大会を通して、全国の仲間がつながり合い、その専門性を掘り下げ、さらに前へと進める力を得る場となったものと確信しております。今までもこれからも、児童館の主役“こども”をDoまんなかに、更に児童館・児童クラブの職員の資質向上と活動の活発化を図っていきたいと思います。

最後に、ご尽力いただいたすべての皆様のご支援・ご協力と参加していただきました皆様に深く感謝申し上げます。

第18回全国児童館・児童クラブ大会実行委員会

実行委員長 木戸玲子

大会概要

趣意

児童を取り巻く地域や家庭のあり方が多様化し、児童の福祉的課題が顕在化する中、地域における子どもの居場所づくり及び子ども、家庭を支援することが重要となっています。

そこで、全国の児童館・放課後児童クラブ関係者の総力を結集して全国大会を開催し、子どもの育ちや子育ての現状について情報共有するとともに、こども基本法（令和4年法律第77号）の基本理念を踏まえて、あらためて地域の子どもの居場所として研究協議を行い、社会的認知の向上を目指します。

主催

全国児童厚生員研究協議会 全国児童館連絡協議会
一般財団法人児童健全育成推進財団

後援

こども家庭庁 社会福祉法人全国社会福祉協議会
児童厚生員養成課程連絡協議会、民間児童館ネットワーク
全国地域活動連絡協議会

主管

第18回全国児童館・児童クラブ大会実行委員会

開催日

令和5年11月25日（土）
26日（日）に視察・エクスカージョンを設定

対象

児童館職員、放課後児童クラブ職員、行政担当者、研究者等

参加費

参加費 3,000円（交流会費等別途）

参加人数

523名（7会場合計）

会場

会場名	開催地	使用施設
北海道会場	札幌市	札幌市中島児童会館
東京会場	東京都江東区	東京ビッグサイト
北信越会場	新潟県柏崎市	柏崎市文化会館アルフォーレ／新潟県立こども自然王国
関西A会場	京都市	下京修徳ふれあい福祉会館
関西B会場	神戸市	こべっこランド
四国会場	愛媛県松山市	松山市ハーモニープラザ
沖縄会場	沖縄県うるま市	うるま市役所

※本大会での「こども」の表記は児童館ガイドラインに準じ原則「子ども」を使用しています。
各タイトル、こども家庭庁と関連した用語やメッセージの場合は「こども」を使用します。



プログラム

時刻	内容
13:00	オープニング ・開会宣言 木戸 玲子 第18回全国児童館・児童クラブ大会 実行委員長 ・主催者挨拶 鈴木 一光 一般財団法人児童健全育成推進財団 理事長 ・来賓挨拶 加藤 鮎子様 内閣府特命担当大臣（こども政策担当） 塩崎 彰久様 厚生労働大臣政務官
13:20	全国から集めた子どもたちの声（動画）
13:25	基調講演【シンポジウム】 「遊びで子どもの意見を聴くために」 2021全国児童館実態調査では児童館ガイドラインにおける活動内容において「子どもが意見を述べる場の提供」は62.9%の児童館で実施されており、10年前の調査と比較して1.5倍に増加しています。 こども家庭庁が「こどもまんなか社会」の実現を掲げ、子どもの意見を重視していること、児童館ガイドラインの理念にも子どもの意見の尊重が謳われていることから、子どもの意見表明・聴取はますます児童館の根幹となる取組となることでしょう。このシンポジウムでは「こどもの居場所づくりに関する指針（仮称）」が審議されているこども家庭審議会 こどもの居場所部会の状況や児童館の実践事例から、子どもの声を聴くファシリテーターとしての役割を探ります。
	■コーディネーター 新潟県立大学 人間生活学部教授 植木 信一 氏 （こども家庭審議会 こどもの居場所部会委員）
	■シンポジスト 石巻市子どもセンターらいつ 館長 荒木 裕美 氏 （こども家庭審議会 こどもの居場所部会委員） 八王子市 川口子ども・若者育成支援センター センター長 井垣 利朗 氏 （児童健全育成指導士）
	  
14:15	休憩
14:30	分科会 ※子どもの居場所、子どもの声を軸に、全国児童厚生員研究協議会（全児研）の有志が企画運営委員となり、8つの分科会を企画から運営まで行いました。
16:30	休憩
16:40	エンディング ・各分科会会場のリレー中継 ・全国発議 こどもDoまんなか宣言 ・閉会宣言
17:00	終了
	交流会（会場毎）

※オープニング～基調講演、エンディングは東京会場からZoomにて配信します。

開会宣言



全国児童厚生員研究協議会会長

木戸 玲子

皆様こんにちは。4月にこども家庭庁が創設され、さまざまな「こどもまんなか社会」の取り組みが行われる中、本日はこども政策担当大臣加藤鮎子様、そして厚生労働大臣政務官塩崎彰久様、この2人にもお越しいただき全国児童館、児童クラブ大会が開催されますことをとても嬉しく思っております。

ここ数年は大勢が参集することに制限があったこともあり今大会は子どもをまんなかにして全国7か所が繋がりあって開催となりました。

全国の児童館・放課後児童クラブの関係者の総力を結集して、子どもや子育ての現状をしっかりと捉えながら、こども基本法の基本理念を踏まえ、これまでの自らの活動を振り返り、改めてこれからの地域の子どもたちの居場所として、研究協議を進めてまいりたいと思います。

全国のみんな！用意はいいですか。

第18回全国児童館・児童クラブ大会「今までもこれからもこどもDoまんなか」開会を宣言いたします。



主催者挨拶



一般財団法人 児童健全育成推進財団

理事長 鈴木 一 光

「第18回 全国児童館・児童クラブ大会」にご参集くださりまして誠にありがとうございます。主催者を代表して心から歓迎をしたいと思っております。

この大会に至る経緯を長く生きた証に、少しお話をしたいと思います。この発端は、平成3年2月11日建国の日でございます。この時、児童厚生員の有志が東京の児童厚生員に働きかけまして「児童館もっと元気を出そうよ」と当時の東京都の児童会館に1人500円の会費を持って50余人が集まりました。この背景は財政難が地方にも押し寄せてきまして、健全育成の活動を行う児童館は緊急性も乏しいということで、児童館と児童館の職員が不安定な環境状況に置かれることが進み始めました。この時期だからこそ「先ず隗より始めよ」の故事に倣いまして自分たちのできることを一生懸命やって、専門性を世に示そうとスタートをしました。

その後この思いが全国にも拡大しまして、平成7年2月11日に第1回の全国大会として東京大会が開催されることになりました。

この第1回のゲストに呼ばれたのが私どもの前身である社団法人全国児童館連合会の創立者の山形県の阿部千里、初代理事長です。

阿部は、若い時から地元山形県で農半期における子どもの事件事故に心を痛め、なんとか子どもの居場所が欲しいということで東奔西走しまして、児童館に思い至ります。

そして、昭和34年から単身東京に上京し、厚生省と自由民主党に陳情を重ね、昭和38年、10万円の児童館運営費の国庫補助をつけることに成功いたします。

この陳情の過程で、阿部は60人からの代議士の賛同を得て、代議士会を党本部で開催しました。その時先頭に立って、引っ張ってってくれた方が加藤鮎子大臣のお父様の加藤紘一先生、それから塩崎厚生労働大臣政務官のお爺様の塩崎潤先生でございます

今日ご列席をいただき、このご縁に深く感謝しております。本日もご多忙の中ご列席をいただきまして誠にありがとうございます。

さて、本年4月にこども家庭庁が発足しました。

これによって、子どもの政策は一元化をされ、子ども、保護者、そして現場の視点に立った「こどもまんなか社会」がいち早く実現する期待をしています。

ご後援をいただいた、こども家庭庁にこの場を借りまして厚く御礼を申し上げます。

児童館も児童クラブも存在理由からしてこどもまんなかです。

「今までもこれからもこどもDoまんなか」というテーマは、まさに私たちが子どもに寄せる思い、そして、子ども観、子どもに対する姿勢が表されたものと思っております。この大会が成功に終わり、そして、これからの児童館・児童クラブがこどもまんなか社会の実現に向けて、その一翼を担えることを念じましてご挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶



内閣府特命担当大臣（こども政策担当）

加藤 鮎子様

皆様こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、こども政策・少子化対策を担当する内閣府特命担当大臣の加藤鮎子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

第18回全国児童館・児童クラブ大会の開催にあたり一言ご挨拶お祝いを申し上げます。

本大会が18回目を迎えられたことに、心からお喜びを申し上げるとともに日頃から児童の健全育成や子育て支援に関わる関係者の皆様に、心から敬意を表します。

皆様もご承知の通り、子どもを取り巻く状況は深刻かつ複雑化しており、課題への対応が待ったなしの状況となっている中、本年4月1日にこども家庭庁が発足しました。

こども政策の司令塔として、こどもまんなか社会の実現のため、政府全体のこども政策をさらに協力に押し進めてまいります。

さて、児童館は長らく地域のこどもの居場所として認知されてきました。

この機能強化がさらに図られるとともに、児童館ガイドラインに基づき、昨今のこどもを巡る福祉的な課題への対応が期待されています。

また、放課後児童クラブについては、今年度末までの新・放課後総合子どもプランに基づき量的整備を進めるとともにその質の向上を目指しています。

加えて、今年6月に閣議決定しましたこども未来戦略方針におきましては、常勤職員配置の改善を盛り込んでおり、年末に向けて具体化の検討を進めてまいります。

こども家庭庁におきましても、引き続き様々な取り組みを推進することで、児童館、放課後児童クラブの皆さんがより発展することを期待しております。

さらに、こども家庭庁では、現在こどもの居場所作りに関する指針を年内に閣議決定するため、子ども若者の声を聞き、有識者の皆様による議論を重ねているところでございます。

今日この後ご登壇される予定の植木信一先生や荒木裕美館長も審議会の方で大変お世話になっております。この場をお借りして御礼申し上げます。

この指針が皆様の活動の一助となるよう引き続き尽力をしてまいります。

本大会は例年と異なり全国7会場での同時開催とお聞きしております。全国各地で子どもたちの健やかな育ちについて、改めて考える機会となるようご祈念を申し上げます。

結びになりますが、本大会の開催にご尽力をいただきました関係者の皆様に熱く御礼を申し上げますとともに、本大会に参加された皆様のますますのご活躍をお祈りいたしまして私からのお祝いの挨拶をさせていただきます。

令和5年11月25日、こども政策少子化対策担当大臣加藤鮎子

本日は誠におめでとうございませう。



来賓挨拶



厚生労働大臣政務官

塩崎 彰久様

皆さん、こんにちは衆議院議員で厚生労働大臣政務官の塩崎でございます。

まずは、本日第18回全国児童館・児童クラブ大会がこうして盛大に開催されますこと、心からお喜び申し上げたいと思います。

しかも、全国7会場の中には私の地元の愛媛県松山市も含まれております。きっと皆さん喜んでくださっているんじゃないかと思います。

先ほど鈴木理事長から私の祖父の話聞きまして、そんな長い長いご縁をこども政策との関係で受け継いでるんだなと改めて感じました。

私の父も厚生労働大臣を務めさせていただきました時に児童福祉法の改正があり、児童養護や里親制度で支援していく改革に取り組みました。

私が児童館と関わるきっかけを与えてくださったのが全国児童館連絡協議会の敷村会長でございます。

えひめこどもの城という大型児童館があるんですが、児童館の職員の皆さんからお話を伺う中でこどものお世話をしていくこと、そして子どもの声を反映していくことの大切さを色々教えていただきました。

そんなきっかけもあって、私が議員になって1番最初に取り組んだ議員立法が、昨年6月に成立したこども基本法でございます。

共同提案者としてまだ議員になって1年も経たない私が、こうして与党の先生方からの質問に答えて法律の趣旨、つまり、これからは政策の権利主体としてこどもを位置付けていくんだ、そしてこどもの政策を作っていく上で子どもの意見を、声を反映していくんだといったことをお話をさせていただいたのを覚えています。

会場前に1200人のお子さんたちの声のポスターがありましたけれども、まさにこども家庭庁の有識者会議の中でも児童館がこれからこどもの意見を吸い上げていく、その大きな役割が期待されているところです。

今年の4月から、こども行政は厚生労働省からこども家庭庁に移管されたわけでございますがこれからは、こども政策そしてそれ以外の福祉政策と切り分けるのではなくて、全世代型の社会保障という形でこども政策も、そして、それ以外の福祉政策も切れ目なく繋がっていくような取り組みを厚生労働省としてもしっかりとこども家庭庁とタッグを組んで、後押しをさせていただきたいと思います。

そうした時にぜひ、今日ご参加いただいている児童館の皆様の現場の声を、遠慮なく我々の方にお寄せいただければと思っております。

結びに、本日の全国大会開催にご尽力いただきました者の皆様に、心から感謝と敬意を申し上げますとともに、この全国大会が子どもたちの明るい未来を開いていく大きな一歩となることを心から祈念しましてお祝いのご挨拶とさせていただきます。おめでとうございます。

基調講演【シンポジウム】

「遊びで子どもの意見を聴くために」

2021全国児童館実態調査では、児童館ガイドラインにおける活動内容において、「子どもが意見を述べる場の提供」は62.9%の児童館で実施されており、10年前の調査と比較して1.5倍に増加しています。こども家庭庁が「こどもまんなか社会」の実現を掲げ、子どもの意見を重視していること、児童館ガイドラインの理念にも子どもの意見の尊重が謳われていることから、子どもの意見表明・聴取はますます児童館の根幹となる取組となります。このシンポジウムでは、「こどもの居場所づくりに関する指針」が審議されているこども家庭審議会 こどもの居場所部会の状況や児童館の実践事例から、こどもの声を聴くファシリテーターとしての役割を探りました。

■コーディネーター

新潟県立大学 人間生活学部教授 植木 信一 氏（こども家庭審議会 こどもの居場所部会委員）

■シンポジスト

石巻市子どもセンターらいつ 館長 荒木 裕美 氏（こども家庭審議会 こどもの居場所部会委員）

八王子市 川口子ども・若者育成支援センター センター長 井垣 利朗 氏（児童健全育成指導士）

課題提起

植木

こども家庭庁のこども家庭審議会にこどもの居場所部会が設置され、その中で議論した「こどもの居場所づくりに関する指針」が間もなく閣議決定されます。指針には「その場や対象を居場所と感ずるかどうかはこども若者本人が決めることである」とあります。また、子どもたちが決める居場所の基本的な視点として、「ふやす・つなぐ・みがく・ふりかえる」の繰り返しの中で多様な居場所がつくられることとなります。この中に、子どもたちの居場所の重要な選択肢の1つとして、「児童館」が固有名詞として明確に位置付けられています。では、子どもたちは何を基準に居場所を決めるのでしょうか。こどもの居場所部会の中で行われたこどもアンケートやヒアリングでは、好きなことをして自由に過ごせること、いろいろな人と出会えることや友達と一緒に過ごせること、すなわち、1人で自由にいたいというニーズと、友達と一緒にいたいというニーズ、一見相反する2つのニーズが同居している実態が分かってきました。これはまさに児童館そのものであり、これまで児童館が担ってきた役割そのものです。果たして児童館は子どもたちの声や意見を正面から受け入れ、反映できる場になり得ているのでしょうか。そういった具体的なことも含め、お2人からお話をいただきたいと思っております。



八王子市の取組 ～子どもの声を聴くには 様々な段階がある～

井垣

今日は、子どもの声を聴くには様々な段階があるというお話をさせていただきます。「子どもの声を聴いていますか？」と言われたら、もちろん「聴いています」と答えると思いますが、「ど



のように聴いてどう受け止めていますか？」という質問されたら、いかがでしょうか。どの発達段階の子どもがどんなことを話しているか、私たちはそこまで考えながら直接関わり、声を受け止めています。児童館は、誰もが自由に利用できる子どもの居場所であり、そこに私たち児童厚生員がいるわけです。

子どもの声を聴くための大前提は、居場所にいる子どもたちが安心安全であると感じていることです。八王子市では4つのステージを意識して子どもの声を聴き、遊びのプログラムを立てています。

1、「居心地のいい自分と場所へ」

児童館は日常の会話の中で子どもたちのいろんな声を聴いています。一緒に遊び、話をし、その声を形にしています。

2、「試しに『やってみよう』自分と場所へ」

遊びを通してやってみようという声を様々な方法で、主体的にチャレンジできるように受け止め、形にしていきます。そこで子どもたちは形になっていく経験を積んでいきます。

3、「自ら『やってみよう』自分と場所へ」

子どもの声を受け止め、遊びのプログラムを作り上げます。「やってみよう」が「できた！」になる成功体験は、自分自身の意見として社会に関わるような言葉も発せられるようになります。

4、「小さいコミュニティ（児童館）から地域社会へ」

「やってみよう」を形にする際、児童館は地域の子育ての環境作りを行っている施設として、地域に子どもの声を届けること、そして一緒に子どもの声を形にしています。今、子どもの声を子ども施策に反映していこうと言われてはいますが、児童館はすでに児童館祭りやお化け屋敷のような子どもがやりたいことを地域と一緒にやっているのではないのでしょうか。

その中で大事なものは、子どもの声を「手段」としてはいけないということです。大人の都合のいい声を聴く、大人の求めている声しか聴かない、聴こえてくる声しか聴かない、もちろん児童館ではそういうことはないと思います。子どものありのままの声を大切に、発達段階に応じて工夫をしながら声を受け止めているはずで、そして最も大事なものは、子どもの声をフィードバックすることです。子どもに適切な情報を分かりやすく伝え、子どもの意見に対して一緒に考え、どういう取り組みができるか、地域社会にどう届けられるのかを子どもたちに戻していくこと、そして私たちも振り返りをしていくことがとても重要です。



八王子市は、子どもの声を届ける役割を児童館の職員が担い、市長や教育長に届ける機会を設けています。それが『子ども☆ミライ会議』です。

子どもの声を届け、実現した例を1つ紹介します。子どもたちに「どのような居場所があっ

たらしいか」とアンケートを取ったところ、「駄菓子屋が欲しい!」という声が多くあり、「これは子どもの居場所となる」と子どもたちが言いました。そこで、『子ども☆ミライ会議』で情報提供をし、委員の子どもたちが「子どもの居場所として地域の中に駄菓子屋が必要である」と市長や教育長に提案をしました。児童館はそれをすぐに形にすることができませんでしたが、地域社会や社会資源とつながっており、子どもの居場所を作りたいという団体とマッチングすることができました。その団体は、子どもたちからさらに意見を聴いてくれました。例えば、「駄菓子屋には小さな子どもたちも来るから棚を低くしてほしい」とか、「小さい子どもたちには30円は高いので10円のお菓子を揃えてほしい」などの声を聴き、地域の方たちが駄菓子屋を作ってくれました。このように、児童館が地域の民間の力を使いながら、子どもの声をつなぎ、形にすることができました。今では「私たちの言った意見が形になった。今度はこの居場所に私たちが手伝いに行く」と言って、中学生たちが部活後、駄菓子屋を手伝いに行っています。児童館には子どもの声をつなげていくという力があります。遊びのプログラムを作る力、子どもの声を聴く力、つなげていく力、その力を使って子どもの声を地域の中で形にしていくことができればと思います。

植木

フィードバックの仕組みが大変特徴的だと思います。子どもの声を聴く、子ども会議を開くことは、児童館では一般的に行われていますし、児童館ガイドラインにも書かれています。しかし、子ども会議がイベント化してしまうのではなく、どのように児童館の運営に反映されたか、市政にどのように生かされたかということ、子どもたちが知る、ここまでがセットになるということがよくわかりました。

石巻市子どもセンター らいつの取り組み ～居場所にはこどもの参画が必要である～

荒木

らいつは18歳未満の子どもが自由に過ごし、遊びを通して育つ場です。年間3万人が利用しています。利用者の割合を見ていただくと、乳幼児、小学生、中・高校生世代がバランスよく利用しています。いろんな世代がいることで、異年齢での遊びがどんどん膨らんでいたり、会議の場でも意見がまとまったりします。

中高生が小学生の意見を聴いてそれを形にしていくこともあるので、このバランスをうまく保つようにしています。私は、NPOで妊娠期から乳幼児期に特化した子育て支援の活動をしてきましたが、児童館に出会って、妊娠期から子どもをまんやかにずっと関わり、命がぐるぐる回るように見守り続け、そして高齢者になってもボランティアとして来館する児童館って本当すごいと、児童館のポテンシャルを感じ、地域に根差す核となる場所だと思って運営をしております。





ます。

2011年3月に東日本大震災があり、石巻でも大変な被害がありました。行政の施策だけでは復興が追いつかず市民が自ら立ち上がりました。その際、石巻市でセーブ・ザ・チルドレン ジャパンさんが子どもたちにアンケートを取り、子どもたちにも「町のために何かしたい」という思いがあることが分かりました。地域活性化のために何かしたい、という声を受けて、こどもまちづくりクラブが発足。こうした子どもたちの声が市に届き、アイデアを実現したのが、「らいつ」です。「らいつ」は、基本理念に子どもの権利を据えています。私は「らいつ」に関わって初めて子どもの権利に出会いました。それまで親目線での支援を行ってきましたが、子どもたちは守られるだけではなく、自分で考え自分で参加していく主体であり、一緒に考えていく仲間だということを感じ、視点が逆転しました。子どもの権利条約は子どもたちが自分に関することを決める時には、子どもたちもその説明を聴き、説明される権利があることも保障しています。子どもにとって何がいいか、誰が一番子どものことを分かっているかということ、やはり子ども自身です。子どもと共に作り続ける児童館は大切に、大人の“良かれ”ではなく、子どもたちの声を聴くことを大事にしています。

「らいつ」には、運営ルールを子どもたちが決めていく『らいつ会議』があります。自転車の置き方やゴミの捨て方、どんな漫画を買おうかななどの話や、このルールはいらぬという話になることもあります。先ほどの地域を活性化するための『子どもまちづくりクラブ』も子どもたちがフィールドワークをしながら、テーマを決めて取り組んでいます。そして、ここがポイントですが、児童館の運営や事業計画などを決めていく際に子どもと大人と一緒に考え、最終決定の場に子どもがいることに大きな意義があると思っています。「らいつ」では大人5名子ども5名で話をし、オブザーバーの子どもがいる時もあります。こういった決定の場に子どもたちがいないことがありますか？子どもたちの話を聴いても、決める時には大人目線で決めてしまう。すると、子どもの意見って何だったんだと思うし、子どもたちも「自分たちでは変えられない」という気持ちになります。私たちの運営に対して、子どもたちが利用者の目線でいろいろなお問い合わせをしてくれます。それに対して声を返しながら運営を行っています。子どもの参画は必要であるというよりは、それなしではできないという考えが私たちの運営の中にはあります。また、参画を支えているのは、日々の遊びや安心して過ごすことができる環境です。この環境をどう作るかで子どもたちの声が出てきて、まちづくりの活動を行うことができると日々感じています。

植木

最終決定の場に子どもがいるところが、最大の特徴だと思います。子どもの声を聴き、意見を取り込む、これは決定に至る途中では行われうることです。しかし、最終的にどう決定したかという場にも子どもがいる、これこそがまさに子どもの主体性を生かす、子どもの声を生かす児童館の取り組みなのだと思いました。

【ディスカッション】

福祉課題対応と遊びのプログラムについて

植木

後半は、イベントも含めた遊びのプログラムとそれ以外の日常の遊びと大きく2つに分けて考えます。まず1つ目の遊びのプログラムを子どもと行うということについて。児童館における福祉的な課題への取り組みが、遊びのプログラムと照らし合わせた場合、どのような形で遂行され対応されているのかを聞いてみたいと思います。

井垣

日常の中で、子どもたちは自分で遊びを選んで、作っていきます。もちろん、私たちが刺激として与える遊びもありますが、子どもたちの遊びの選択権はとて大きいと思っています。その中に子どもの声というのは全て含まれていると思います。遊びの力は、子どもに置き換えると、生きる力につながると思います。社会的福祉課題にはいろいろな言葉で言われてる課題はあるにせよ、この生きる力を育むのが遊びの力であり、私たちがその遊びを重要視していることは、児童館がとて大事にしている日常の福祉課題に対する関わりとして、遊びを大事にしていると言えるのではないかと思います。

遊びは、医療的にも効果があると言われてますし、心のストレス発散にもつながります。遊びの力を育むことは、福祉的課題に対する大きな力ではないかなと感じており、日常的に遊びを大事に取り組んでいこうと思います。

荒木

遊びのプログラムと言うと、「らいつ」だと“漁業体験”や“農業体験”などをイベント的に組むこともあるのですが、やはり日々の遊びがとて面白いですね。子どもたちの抱えてる課題は、本当に1人ひとり違いますがそこに気づくための遊びだと思うのです。特に、子どもの貧困とか不登校とか色々な課題はありますが、その状況を、どういう風に改善していくかということもあると思います。異年齢と交流したり、好きな材料を持ってきて「らいつ」のキッチンで作ったり、家でできないようなことをやっていることもあります。子どもたちが自分で遊びの企画をするときは、全部が上手くいくわけではなく、企画の時点でボツになるものもあれば、やってみただけで失敗するものもあります。その失敗体験や失敗が許される機会が不足していると思うこともあります。子どもたちに体験の機会を共有し、課題にアプローチしていく遊びをしています。

植木

子どもたちが地域で遊ばなくなったという声をよく聞きますが、これは遊ばなくなったのではなくて、遊ぶきっかけがつかめなくなったと言うことができるかもしれないです。今のお話の中で、様々な体験を繰り返し経験する中で、子どもたちは自らの成長発達を促していく、こういった機能も児童館の中にあり得ると思いました。

児童館が日常の遊びを大切に理由

2つ目の日常の遊びについて。子どもたちは児童館に来てでもいいし来なくてもいいし、児童館に来れば自分たちで今日は何して遊ぶのかなと遊びを選択することができます。ではなぜ児童館は、そうした日常や日常の遊びを大切にするのでしょうか。

荒木

大人が介入すると遊び自体が遊びにならず、遊びきれないこともあると思っています。一緒に遊ぶことで同じ目線に立つ、同じ土俵に立ち、“大人”と“子ども”ではなくて、一緒に遊ぶ『横の関係、斜めの関係』になると思っています。子どもたちは、安心しないと話してくれないので「この大人はどんな大人だろう？」と、新しい職員が来ると試されます。必要以上に決めつけないということを子どもたちは感じていて、評価しない大人を、遊びを通して見ると感じています。そして、遊びで信頼関係ができてくると、帰り際や遊びが収束した辺りで、ポロッと本音がでてきて、そこから本格的な相談になることがあります。遊びの中で信頼関係を作ってつづやきを拾っていく。私は子どもの声を聴くことは命を守ることだと思っており、これを遊びを通してやっていると思っています。

植木

子どもたちが遊びを通して大人を見ている。また、大人も子どもたちの普段の遊びを見ながら、イベントでは捉えきれなかった子どもの姿や声を拾うことができる。子どもの声や意見は、そうした日常の関わりの中から気づきがある。日常での遊びが子どもと大人、あるいは子ども同士の信頼関係の構築につながるヒントになると思いました。

井垣

初めて来館する子どもに対し、職員の武器として遊びがあるのはすごいことです。遊びの中で「この子はこういうことを考えてるんだ、こんな思いを持っているんだ」と気づく力が私たちにあります。児童館が日常の遊びを大事にするのはそこだと思います。家族として過ごしていなくとも、私たちはその子をとても大事に考え、どんなことを考えているのかを一番に考える、それが分かる方法が遊びです。一緒に遊べることはすごいスキルですし、遊びを通して子どもの言葉を聴いています。子どもたちは、言葉を形や可視化させることは難しいけれども、遊びを通してだったらできるし、私たちだったら遊びを通して子どもの声を聴くことができると思うので、私たちは日常の中で遊びを大事にするべきだと思っています。

植木

遊びが、言葉の可視化であるということ。子どもたちが何気なく遊びの中で様々な発言をする、その言葉と言葉にできない様子、雰囲気、態度、行動も子どもの声の中にひょっとしたら含まれるかもしれない。そうした言葉にならない言葉も含めて遊びに包括され、私たちは様々なものを見出ししていくことができるのかもしれないです。



「遊びで子どもの意見を聴くために」

井垣

子どもたちの大切な居場所である児童館の中では、まちづくりと同じようなことが行われていると思います。子どももまちの住民であるし、大人と同じく住んでいるわけですから、大きな視点で子どもはまちづくりをする1人だと私たち自身が実感し、伴走して一緒によりよいまちづくりをしていこうという意識を持つことが必要です。児童館の小さい子どもたちのコミュニティの中で、子どもと関わることの積み重ねが、間違いなくこれからのまちづくりの施策につながります。子どもの声を聴くことがわかっている児童館だからこそ、それを汲み上げて届けていく仕組みを形として示していくことも、とても大切な役割であり、持っている力を最大限に活かしていくことになると思っています。

荒木

場を作ったり信頼関係を作ったりしていく時の1つのツールが、遊びです。遊びながら「いつもと違うな」、「ちょっと今の様子気になる」と気づいたことが、問題の発生予防につながるとしています。困りごとがある子どもも何かをやりたい気持ちをもって、そこを私たちがぐすぐっ

たり、見つけたりして心に火をつけていく。そうすると、学校で困ったことがあっても、児童館では自己実現をしている違った面を見つけることができます。子どもの片側からしか見えていないものを反対から照らしていくことが児童館はできると思います。ただ、その子が周りから一人の存在として認められるのが、児童館にいる時だけではダメだと思っています。今、大人がどう子どもに関わるかが、これから大事になるので、遊びを通して、そして子どもの権利を広げていけたらと思っています。

植木

やはり、大人が遊びを作り出すのではなく、子どもが主体的に遊びを作り出すんですね。「児童の遊びを指導する」なんて文言がありますけれども、「児童が遊びを作り出す、主導する」という表現の方が、近いのかもしれないですね。子どもたちの様子も含めた声、あるいは声なき声、これを丁寧に聴いて児童館を子どもの居場所として作り上げていく責任や責務が我々にはあるのではないのでしょうか。児童館の主演は、大人ではなく子どもです。まさに「こどもDoまんなか」。そうした居場所である児童館に期待します。



第1分科会

可能性は無限大！ 子どもと共につくる児童館・児童クラブとは

第1分科会では「子どもの声を聴き、子どもたちと共につくる児童館・児童クラブとは？」をテーマに札幌市児童会館での「子どもの声を取り入れた企画」や「子どもたちの要望書」の活用事例、中標津町の児童館での「子どもと保護者の視点」の実例報告を基に、これからの児童館・児童クラブの可能性について考え明日からの活動のヒントを見つけるグループワークを実践しました。

分科会内容

【中島児童会館見学ツアー】

会場である中島児童会館見学会からスタートしました



【アイスブレイク】

各グループに分かれ、「最近ハマっていること」「子どもの時に好きだったあそび」「子どもとかかわる時の得意技は」などをテーマに自己紹介し、和やかな雰囲気を作りました。

【事例報告1 「おみせやさんごっこがしたい」の声から広がる子どもたちの「やってみたい！」】

- ◇スピーカー：札幌市菊水やよい児童会館 松尾知実館長
 日常の遊びの中から、子どもたちの「お店屋さんごっこがしたい」の声を職員が聞いて、実現するまでの取り組みについて発表。
- 子ども同士の意見は否定しないこと
 - 子どもたちが意見を言いやすい雰囲気づくり
 - 子どもたちの意見を重視
 - 学校や保護者も巻き込む

《事業実施後の子どもの変化》

- ☆職員が用意したもので楽しむ⇒自分たちのやってみたいことを職員に手伝ってもらう
- ☆実現が自己肯定感向上につながり「これやりたい」が多く表出し、自主性が向上した。

【グループワーク①】

- 「自館の中で子どもの声を聴いて実施している事」
- ◎子どもの意見で運動系の大会を開催した
 - ◎児童館の図書や遊具購入の際に、子どもの意見を聴いた
 - ◎子どもたちのやりたい遊びを体育室で実施した



【事例報告2 子ども意見を取り入れた取り組み】

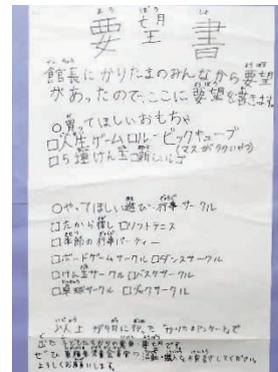
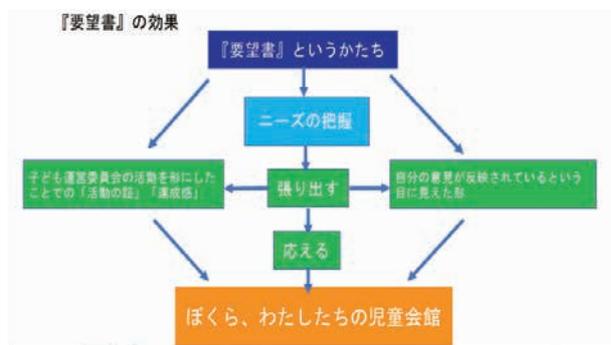
◇スピーカー：札幌市東雁来児童会館 館長 平木 宏明氏
 札幌市では、子どもたちが児童会館の運営等に参加し、自分たちの意見を反映できる仕組みとして「子ども運営委員会」が全館に設置されています。

○子ども運営委員会の取り組み

子どもたちが集めた意見を、「要望書」として会館掲示し、館長がリアクションすることで「自分たちの意見が会館運営に反映されているという目に見える形」となり、子どもたち自身が児童会館を作っている仕組みが可視化された事例

○中高校生のインターンシップの受入れについて取り組み

中高校生のインターンシップを積極的に受け入れ、学校と協力して生徒のやりたいことを実現につなげ、達成感を味わうことで次の「やりたい」を引き出す事例



【グループワーク②】

「自館で実施してみたいこと、取り組んでみたいこと」

- ◎他施設との連携事業
- ◎子どもの声を聴く仕組み作り
- ◎子ども会議・子ども運営委員会
- ◎子どもによる要望書 意見箱の設置



【事例報告3 可能性は無限大！子どもと共に作る児童館・児童クラブとは？】

◇スピーカー：中標津町西児童館 大久保 さくら氏
(全国児童厚生員研究協議会理事)

中標津町児童館での取り組みについて発表

○0～18歳までが利用することができる施設の特性について
○子どもたちの意見を形にして、子どもたちと作る事業について地域や保護者を巻き込みながら実施する意味

○日常の保護者とのかかわりについて

仕事や生活に忙しくて保護者の方が、子どものことが見えていない、また、目を向けられない方がいる。

子どもたちは、親も学校の先生も選ぶことができないけれど、児童館の職員のことは選ぶことができる。

子ども一人ひとりの言葉ににならない心の声に気づき、保護者も含めて、子育て家庭に寄り添い伴走しながら支援をしていくことが大切。

○児童館・児童クラブのこれからについて

子どもの声をしっかり聴く

こどもまんなか社会は、子どもたちの声を聴いてその積み重ねがこれからの国を変えていくことになる。



【グループワーク③】

「言葉ににならない心の声への対応について」

- ◎特性のある児童の様子を保護者に伝える際の苦悩
- ◎児童館と児童クラブができることは何かを考えた
- ◎課題を抱えた家庭の子どもや保護者とのかかわりの難しさの共有

参加者数

18名

参加者の声

最後に、「明日からすること」を参加者一人ひとり紙に書いて、宣言しました。

- ・子どもの声を聴く！！子どもの話に耳を傾ける
- ・子どもと一緒に人とのつながりを大切に、遊んでいく
- ・「できない」じゃなくて「できる」方法を探る
- ・直球過ぎる自分を抑え、ナナメの関係を大切にする
- ・子どもの何気ない「ねえねえ」の一言を逃さない
- ・子ども一人ひとりに寄り添う
- ・子ども、保護者とたくさん話をします
- ・館長あての要望書を子どもたちに書いてもらいます！
- ・毎日、子どもたちと遊び笑顔で保護者と話をする
- ・よく遊び、よく笑う
- ・すべての子どもたちが生き生きと過ごせる児童館を作る
- ・子ども運営委員会を立て直す



分科会集合写真

担当者から

「児童館がこれまで、地域の子どもの居場所として社会的な役割を果たしてきたことを自負するとともに、こどもまんなか社会の実現に向けて、これからも子どもが安全に身を置ける場、安心できる心の拠り所として、子どもの声や気持ちを受け止め、地域社会の期待や保護者の負託に応えていく」ことの必要性がうたわれており、今回の事例のように「日常から子どもたちの声を拾うこと」、子どもたちが「こういう意見を出していいんだ」と感じてもらい、「できないよ」ではなく「これならできるよ！」と言ってあげられる我々大人の役割等、あらためて感じました。

担当者名

- ・大久保 さくら (北海道中標津町西児童館)
- ・松尾 知実 (札幌市菊水やよい児童会館)
- ・平木 宏朋 (札幌市東雁来児童会館)
- ・三好 達也 (札幌市栄通児童館)



北海道会場全体集合写真

第2分科会

Doなる？ Doしてる？
小学校高学年から始める10代の居場所づくり

東京都港区にある麻布子ども中高生プラザ副館長の佐野氏をゲストスピーカーとして招聘。「小さな子どもの笑顔」「夢中になって遊ぶ小学生のエネルギー」「中高生世代のまっすぐな行動力」「子どもたちを見守り、育む大人たちの眼差し」そのひとつひとつを大切にしている児童館・児童クラブだからこそ、そこに携わる私たちがどんなことができるのか、会場の皆さんとのクロストークで思いを共有しました。

分科会内容

【児童館における高学年の居場所づくり～麻布子ども中高生プラザの実践から～】

◇ゲストスピーカー：麻布子ども中高生プラザ 副館長
佐野 真一氏

「今後、ますます子どもが子どもらしくいられる居場所づくりが進められる。でも、地域性やいろいろな要因で利用は様々ですよ」そんな言葉でスタートしました。

児童館において「低学年の利用が中心」「中・高校生世代の利用に繋がらない」等の声が聞かれ、「思春期の子どもたちといきなり繋がれて言われても…」というのが本音だと思います。麻布子ども中高生プラザで取り組んでいる「居場所づくり」をヒントに分科会参加者が一緒に考えていきました。



【居場所づくりの3つのポイント】

ずっと居たくなる心地よさと自分たちの居場所としての主体的取り組みの支援としての『環境設定』、「新しい仲間づくり」「魅力ある体験活動」「役立ち体験により、利用者の施設への帰属性を高めること」等を目的とした『つどい』の実施、「コミュニケーション能力」「安定した感情コントロール」「職員のチームワーク」「ワーカーとしての能力」「ファシリテーターとしての能力」等の職員能力が居場所づくりの3つのポイントとして共有されました。

【児童館の居場所の特徴】

これらのポイントを踏まえた居場所づくりをするうえで、児童館の居場所の特徴として「多様で煩雑」「自由とルールが共存」「不定形で流動的」であると佐野氏から話がありました。来館する子どもたちは、その人その人の生活が

あり、昨日はこのやり方だと言っていたのが、今日は「やっぱりこっちのやり方」など、その難しさの中で考えていくのが児童館であると話された後に、「麻布子ども中高生プラザでは来館する子どもたちと麻雀してるんですよ」という話に驚きがあったものの、「もちろん健康麻雀ですけど」という言葉に参加者は「多様さ」と「自由」そして「ルール」が対称であることの本質を考えるきっかけになりました。

【居場所を構造化して考える】

児童館は、子どもたちが「ただ来る」「ブラブラする」等、自由に来ることができ、自由な意思で過ごせ「ありのままにいられる場」であるところから、「認められる、必要とされる場」になっていく。そして、「自己実現やグループの発展のための活動に取り組む場」となっていく、地域の担い手として認められ、活躍できる場所へと深化していくことが共有されました。

深まれば深まるほど交流も深くなり「居場所が深化」していき、居場所における自発性、主体性、創造性、関係性、文化性が深まっていくことが伝えられ、「居場所を構造化して考えること」そしてその関係づくりの大切さを共感しました。



【高学年児童に対する職員の留意点】

私たち職員が高学年の子どもたちに対して、「抵抗感自分自身がつかっている場合が多い」という話がありました。「子どものサインを見逃さないこと」「自分の価値観からはみ出した子どもとどう向き合うかが勝負」「信頼関係は対等な関係から生まれる」等、佐野氏の経験からの助言を参加者で共有しました。



【高学年児童の居場所づくり機能を高めるロビーワーク】

児童館で活用する子どもや保護者との関係づくりの手法として、主に「遊ぶこと」を通して行う関係づくりである『プレイワーク』と、主に「会話」を通して行う『ロビーワーク』が佐野氏から紹介されました。

とりわけ、「主にロビーなどのスペースにおいて、会話や対応による、子どもや若者との“非定型的関わり”」(※1)と定義されているロビーワークは、麻布子ども中高生プラザにおいて「高学年対応の強化」「相談業務の強化」「多様な居場所づくり機能の強化」「ロビーワーク技術の意識化」を目的に実践されており、「挨拶」「雑談」「口コミ」「募集」「ニーズ理解」など分科会でのポイントが話されました。

ロビーワークとは

「主にロビーなどのスペースにおいて、会話や対応による子どもや若者との“非定型的関わり”」※公益財団法人よこはまユース 七瀬淳子

- 利用者との関係を築く
- ニーズの把握、潜在的なニーズの把握
- 利用者の状況を知る
- 利用者が抱えている困難を知る
- スタッフの思いを伝える
- 新たな関係性を発生させる

※1



担当者から

「すべての子ども・若者たちが、自分らしく心と身体が健康に成長できる社会・施設づくり」をテーマに、麻布子ども中高生プラザの運営に取り組んでいる佐野氏をゲストスピーカーに迎えた第2分科会。

こども政策の新たな推進体制に関する基本方針では「全てのこどもが、安全で安心して過ごせる多くの居場所を持ちながら、様々な学びや、社会で生き抜く力を得るための糧となる多様な体験活動や外遊びの機会に接することができ、自己肯定感や自己有用感を高め、幸せな状態（Well being）で成長し、社会で活躍していけるようにすることが重要である」とうたっています。

とは言い、私たち児童館等に関わる職員は「迷い」「怒り」「不安」「葛藤」等、常に「ゆらぎ」と直面しています。

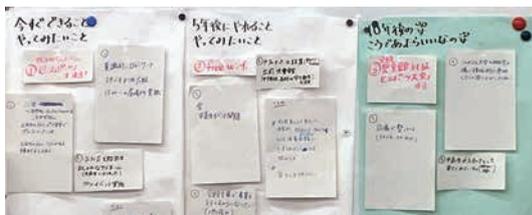
佐野氏は言います。「ゆらぎ」を正面から見ることは、「ゆらぎ」の連続である。一人ひとりの違いやあいまいさがあるからこそ、この仕事の面白さがある。

「ゆらぎ」の中での「しなやかさ」。児童館に求められるソーシャルワークに大きなヒントをいただきました。北海道会場で出会えた皆さんと一緒に「Well being」を達成することが可能な未来社会を創造していきましょう。

【グループディスカッション】

コーディネーターを務める山田氏から、グループでのディスカッションで以下の3点を参加者と共有し、施設の機能には限りがあるが、職員一人ひとりの声かけ、つながり、そのスタッフの思いが何よりも大事であるとの話で締めくくられ、明日への活力とし終了しました。

- ①今すぐできること～やってみたいこと
- ②5年後にできること～やってみたいこと
- ③10年後の姿～こうであつたらいいのすがた



参加者数

19名

参加者の声

「意識的にロビーワークを展開したい」「5年後に中高生イベントを開催したい」「10年後もこのような大会に積極的に参加したい」などグループワークで出た声を参加者全員で共有しました。佐野氏からは児童館に来館する子どもたちの日常生活は一人ひとりが違い、明日と今日でも違う。この「あいまいさ」が難しい。「あいまい」は、型にはめられるものではないからこそ、職人のようにこの仕事の面白さがあることを伝えてくれました。

子どもたちと接することは「ゆらぎ」の連続である。「あいまい」だからこそ、児童館等の職員は「ゆらぎ」の中で「しなやかさ」を発揮することが大事な要素であることを伝えていただきました。

担当者名

- ・山田 美奈（札幌市美しが丘児童会館）
- ・田中 和美（札幌市幌北児童会館）
- ・大門 更紗（札幌市里塚児童会館）
- ・藤岡 恵理菜（札幌市美しが丘小三二児童会館）
- ・水流 彩花（札幌市富丘児童会館）
- ・小森 珠恵（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会）
- ・表 詩柊人（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会）
- ・高橋 雅裕（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会）



第3分科会

児童館からの発信！ 子どもの声を聴くということ

児童館は、誰もが利用できる0～18歳の子どもの居場所！様々な年齢発達にある子どものありのままの声があふれている。子どもの声にならない声をも聴くのが児童館。児童厚生員は子どもの声とどう向き合い、どのように形にしているのだろう。児童館から子どもの声を聴くということを考えて全国に発信しよう！

分科会内容

【はじめに～子どもの声の分析結果の紹介～】

第3分科会では、全国から集まった「1255」の子どもの声にどんな思いが込められているのかを紐解いていきました。一人ひとりの声に目を向けてみると、一番は児童館を始めとする「自分たちの居場所に対する願いや希望が多く、次に、学校などの「環境」に関することや、友達のこと、世界平和といった社会的なことも多くあがりました。

また今回の分析には、八王子市川口子ども・若者育成支援センターに通う中学生も協力をしてくれました。ここでは、「6～8歳の声が多かったので児童館のメインユーザーは小学校低学年だ」「13～18歳は遊びを声にしてる人が少なかった。たしかに児童館に来ている中学生は遊びよりも勉強やおしゃべりをしている人が多い。」といった考察をしてくれました。特に、「コロナでどこも行けなかったから、行きたい場所が声としてたくさんあがっている」「今回は夏に募集したからプールに行きたいなどがあがったんだ。子どもたちの声って季節やその一瞬ごとに変わるものなんだ」という声もあがり、子ども同士ならではの発信や視点がとても印象的な結果になりました。

【事例報告①児童館における日常活動に対する意見表明～年齢ごとのアプローチを考えて～（八王子市川口子ども・若者育成支援センター）】

年齢ごとのアプローチを意識した取り組みや遊びの中で、子どもの声を尊重して社会とつながった事例を紹介しました。

ペットボトルキャップで社会貢献！？

- ① 子どもの声：「ペットボトルキャップで、遊んだらおもしろいな」⇒子どもと一緒に「つもっタワー」という遊びを考える。
- ② 子どもの声：「知らない子どもとやってみたい」⇒八王子市の児童館全館で挑戦する各月対抗児童王という子どもが企画・運営する遊びに発展しました。
- ③ 子どもの声：「まちにキャップがたくさん落ちているから拾おう」⇒形のいいキャップを見つけるため、落ちているものを拾い、18,000個のキャップを集めました。
- ④ 子どもの声：「キャップを寄付してワクチンにかえよう」⇒子どもが、キャップを寄付したことにより、地域から子どもが社会貢献していると認知されました。また地域で一緒に清掃活動が行われるきっかけになり、街がきれいになりました。

【事例報告②やりたい！やってみたい！を一緒に考える「TMK & TMT」スタッフ活動（目黒区平町児童館）】

児童館内での中高生の声を生かしたイベントや、中高生が主体となった活動をテーマに事例を報告しました。目黒区平町児童館では小学生対象のTMKスタッフ(TairaMachiKids)、中高生対象のTMTスタッフ(TairaMachiTeens)のそれぞれが児童館で“やってみたい”を、子どもたちと一緒に考えて実現することを大切にしています！児童館がより、利用しやすい場所になるよう自分たちでルールの改善を検討することもあります。事例紹介では、アナログゲームや卓球大会などの紹介に加えて、「中高生クイズ大会」の様子と、TMKスタッフのインタビューの動画が放映されたことで、子どもの生の声を聴くことができ、とても盛り上がりました。



【グループディスカッション①『子どもの意見表明について児童館での実践を共有しよう！』】

「それぞれの児童館や児童クラブが子どもの意見を聴いて、どのような取り組みをしているのか」についてグループで共有をしました。今回は一人が話をしている間に、グループの他のメンバーがいいなと思ったことを付箋にメモする形式で行ったことで、参加者皆さんが、少しでも多く話ができるようにしました。お互いの実践を聞く中で、特別な取り組みだけでなく、普段大人（職員）が当たり前のように行っている子どもたちとの接し方も、実は子どもの声を聴いて取り組んでいたんだと気づく機会になりました。





【事例報告③子どもの声を地域に届ける～子どもの声を広げることと大人へのアプローチ～（町田市子どもセンターまあち）】

子どもの声を児童館から地域や行政などの大人たちに向けて発信することをテーマに、事例の報告をしました。子どもセンターまあちでは、所属する子ども委員が地域のお祭りに参加したり、子どもセンターの運営委員会で地域に意見を発信したりするなどの活動を行っています。ここでは、子どもたちがお客さんとして参加するだけでなく、地域の一員として大人と一緒にイベントの内容を企画・相談できるように職員がコーディネートしています。自分たちの声を、直営の強みを生かして行政や地域に直接届けるためのワークショップなども行っています。今年度から子どもセンターを窓口に、若者のやりたいことを応援する事業も始めています。



【グループディスカッション②「子どもの意見や声を地域社会に届ける方法について考えよう」】

事例報告を参考に、「子どもの意見や声を地域社会に届ける方法」について考えてみました。各グループ、自分が実践してきたことだけでなく、こんなこともやってみたいといった将来への希望もたくさん出ました。グループで共有した後は、ほかのグループを回り、マネしたいな、これはいいなと思ったものに「いいね」シールを貼りに行き、たくさん「いいね」がついたものについては、書いた人にインタビューを行いました。

（たくさん「いいね」がついたイベントの一例）

- 「100歳と3歳の超世代間交流」
- 「保護者と一緒にビアガーデン」
- 「児童館出身の大学生を呼んで進路相談会」
- 「なんでもいいよBOXの設置」
- 「とりあえず何でもやってみる！」
- 「アフターフォロー「また来てね」を大切に」



参加者数

142名（内ファシリテーター15名、企画運営委員10名）

参加者の声

- ・ほかのグループから出た意見を発表し合うのではなく、見に回るという方法だったので、掘り出し物を見つけに行くようなワクワク感があって良かったです。
- ・「子どもの意見を聴いているか？」と問われ、すぐには答えが思いつかなかったが、改めて考えてみると日常的にやっていることがたくさんあると気づかされました。
- ・取り組みに「いいね」をもらえたことが嬉しかったです。
- ・児童館の子どもは、遊びのアイデアが豊富で自主性があるなと感じたので児童クラブでも活かしたいと思います。
- ・全国の児童厚生員、関係者の皆さんの熱気を感じ、眩しく感じられました。子どもたちの声に耳を傾け、拾い、実現化したいと思いました。やっぱり、児童館が大好き♡子どもたちが大好き♡



担当者から

今回の全国大会では、コロナ後初めての対面開催だったこともあり、リモートでの会議を重ねて準備を進めてきました。この新しい形の挑戦に不安もありましたが、無事開催でき、参加者の皆様にとっても有意義なものとなり良かったです。

また、テーマである「こどもの声を聴くということ」は、普段学校でも家庭でもない、ある意味子どもたちの「ありのままの姿」に接している私たち児童館・児童クラブの職員にとって、今一番求められていることだと思います。今回の分科会で、子どもの声をどのように聴き、受け止め、児童館あるいは社会に向けて届けるために、何ができるのかを参加者の皆様と共有し深めることができたと感じています。そして、改めて全国の児童厚生員の皆様と自分たちが同じ方向を向いて歩んでいることを実感し、とても嬉しく、また自分たちももっと頑張ろうと決意しました。

最後に、このような貴重な機会の実施に向けてご尽力いただきましたスタッフの皆様、本当にありがとうございました。



担当者名（名前順）

- ・赤坂 由香里（目黒区平町児童館）
- ・井垣 利朗（八王子市川口子ども・若者育成支援センター）
- ・志田 拓人（目黒区平町児童館）
- ・下村 一（世田谷区希望が丘青少年交流センター（アップス））
- ・橋本 聡司（港区高輪中高生プラザ）
- ・深水 蒼（目黒区平町児童館）
- ・古郡 理恵（ポピンズエデュケア）
- ・水上 陸（町田市児童青少年課）
- ・水野 かおり（目黒区碑住区センター児童館）
- ・横江 卓（港区港南中高生プラザ）

第4分科会

スタッフの発見力を向上↑

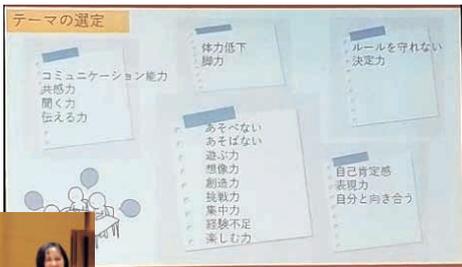
～アソビ×自然パワーで子どもが自ら育つ力を育む～

児童館・児童クラブの「アソビ」と「自然」をキーワードに、日々の実践から子どもが主体的に遊びを生み出す力や工夫する力などについて話しあい、自然の中で発現する子どもの力にどう気づいていくか、子どもの自己実現に向けて何ができるかを考えました。

分科会内容

【はじめに】

事前アンケートの回答結果から、7つのグループに分け、ファシリテーター役を1名選出し、まずは自己紹介からスタート。身近に自然はありますか？の質問では、そう思う…45.5%、そう思わない…25%、どちらでもない…29.5%という結果でした。各自1つ自分の身近な自然を紹介し、自然は自分自身ということにも触れて、様々な感じ方や考え方があることを共有しました。



【グループディスカッション その1】



子どもたちの自己実現に向けて何に困っているのか、どんな力が不足しているのかについて付箋に書き出し、グループ内で話しました。「遊びのルールが守れない」「何をしたいかわからない」「すぐにひまと言う」「感情のコントロールができない」など、子どもたちの様子が伝えられました。このような困り感を解決するために、共感性、伝える力、コミュニケーション能力、想像力、創造力、先を見通す力、



自己決定力、体力、遊ぶ力が必要ではないかという意見ができました。不足している力について分類分けをし、分類したグループを総称してキーワードをつけました。

【グループディスカッション その2】

チームごとに話し合うキーワードを選び、自然の中で足りない力を育てるにはどんな遊びのどんな場面が必要かを考えました。「チーム対抗のゲームをすると作戦を立てる中でコミュニケーションが生まれる。」「宝探しでは男女の垣根を超えて取り組む様子が伺えた。」「木を切る時に、上級生が下級生にやり方を伝え、異年齢の関わりが生まれた。」など、自然の遊びの中から色々な力が育まれている事に改めて気づきました。グループ発表では、遊びの第一歩をどれだけ子どもたちに委ねることができるかという言葉聞き、子どもたちとの関わりの中で力を伸ばしたいという、職員の思いを知ることができました。



【まとめ アソビ×自然パワーは無限大！】

さいごに、子どもが自然の中で遊ぶことは五感が刺激され、豊かな感性や情操を育むことや、興味や関心、やりたいことへの選択肢が広がることで人生の豊かさにも繋がっていくことを確認しあいました。また、子どもの声を聴き、遊びを通して、どんな力が必要でどの様にその力をつけていくのかを伝えていく職員の「気づき力」=「発見力」も大切だということも共感しあいました。

アソビ×自然パワーって無限大∞

- ・見たものや聞いたことを、なぜだろうとふしぎに思い（気づき）、どこからだろう（根拠）とよく考え、調べたり、聞いたりする。
→ 好奇心・思考力・発想力・探求心
- ・対象のものを、なんだろう（興味）とよく観察する、根気よく探す、つかまえることをあきらめない。
→ 集中力・想像力・判断力・忍耐力
- ・自然の中でのびのびと、心も身体も開放して遊び、人との距離感もほどほどにしている工夫して遊ぶことができる。
→ 創造力・共感性・コミュニケーション能力
- ・様々な季節や天候の中で自分がやりたいことを実現するために自発的に身体を動かす。
→ 基礎体力・筋力・免疫力





【こども自然王国で「ワクワク」ビンゴラリー】

1日目の分科会の話しあいを踏まえ、自然遊びの中から
どういう力が発現するのかについて、参加者自らが五感を使
ったウォークラリーに挑戦し、確認しました。王国生き
物タイプ診断で同じ結果となった人でグループを作り、活
動しました。自然の中を散策しながら、見つけたもので造
形したり、触った感触で同じものを見つけたり、葉っぱの
飛行機を飛ばしたりと、身近なもので工夫できる内容を入
れ、実施しました。1日目の分科会で話しあいをした内容
を振り返りながら、心も体も開放して協力する様子が見ら
れました。



参加者数

分科会：59名 実践活動：56名

参加者の声

- ・各地の色々な立場の皆さんとの情報交換は、土地の特色や、普段接している子どもの人数や年齢層も様々でしたが、子どもたちに接する上で抱えている悩みや問題点の共有から、今後のヒントとなる話しあいができてとても勉強になりました。
- ・他府県の方々の熱い思いが刺激になりました。共感できる仲間がいることは励みになります。
- ・自然の中でのグループウォークラリーだと自然に発言し、それが誰かとの会話になり、コミュニティが広がるのかなと思うと、きっかけや投げかけで遊びが広がり、発展していくのだと気づかされました。



- ・五感を使って、子どもはこれほど想像性と創造性が発揮できることに感心しました。私のクラブ・児童館でもやってみたいことがいっぱいあり、視野が広がったと実感しました。自然を通してみなさんと仲良くなれました。

担当者から

全国の会場とひとつになり、参加者の皆さんと一緒に作り上げた北信越会場！

メンバーと悩みながら何度も話しあいを重ね、分科会を作っていく中で多くの学びがありました。当日は大雪かも…と心配しましたが全員会場で会えたこと、そして2日目は青空の下、おもいっきり自然遊びができたことに奇跡を感じています。大人の修学旅行で鍛えられた五感で皆さんの発見力&アソビ力がパワーアップして全国の児童館・児童クラブへ発信していくことを楽しみにしています！本当にありがとうございました。またお会いしましょう！

担当者名

- ・荒川 大靖 (新潟医療福祉大学)
- ・上木 秀美 (えひめこどもの城)
- ・上野 ひとみ (石川県金沢市立三和児童館)
- ・中田 るり子 (愛知県北名古屋市宇福寺児童館)
- ・宮崎 恭子 (石川県金沢市立扇台児童館)
- ・梅田 広美 (新潟県立こども自然王国)
- ・梅田 貴仁 (新潟県立こども自然王国)
- ・迎田 洋路 (新潟県立こども自然王国)
- ・中田 功大 (新潟県立こども自然王国)
- ・田中 彩美 (新潟県立こども自然王国)
- ・陶山 保奈美 (新潟県立こども自然王国)



企画運営委員と当日スタッフ

第5分科会

おとなの考え×子どもの声 とびきり居心地のいい場所！児童館

子どもたちにとって「居心地のいい場所」ってどんな場所？『子どもの居場所だから、子どもたちの声を』と京都っ子たちも会場に集合。おとなの考える「居心地のいい場所・ポイント！」を、エネルギーいっぱいの子どもの想いや願い、声でパワーアップ。子どもの居場所を『とびきり居心地のいい場所』へ。おとなと子どもと一緒に考えました。

【おとなの考え「居心地のいいところ」PR！】

まずは、子どもたちにとっての『居心地いい場所・ポイント！』について。うちの児童館・児童クラブ・自治体は「居心地のいい場所をつくるためにこんなことをしているよ」といった、各施設、自治体の特色を、それぞれの自己紹介も兼ねてPR。取り組みの様子や設備、工夫等を写真やおたより、付箋を使ってどんどん出し合いました。

各グループの模造紙がいっぱいになるほど「いいところ」が集まり、具体的な取り組み方や、子どもの声をどのように取り入れるのか等、気になったところや深めたい内容をグループで話し合いました。



【「それ、いいね！】

次に、各グループでたくさん集まった「いいところ」を、全グループに拡散、共有しました。ワールドカフェ方式で他のグループへ情報収集にでかけます。各グループの発表者が伝えた「いいところ」の情報に対し、「それ、いいね！」「やってみたい」と思ったものには「いいね！」シールを貼りました。

その後、元のグループに戻って、お互いに移動先で話し合った情報を共有し、さらに『居心地のいいところ』について話し合いました。ほんのひとときグループから離れただけでも、メンバーが戻ってくると自然と「ただいま！」「おかえり〜」の声が聞こえ、親しさや仲間意識が芽ばえよりリラックスして意見交換ができました。



【ようこそ、京都の子どもたち！】

京都市内の3つの児童館から、小学校1年生～高校生までの15名の子どもたちが到着。修徳児童館見学ツアーや、全国各地のおやつを食べて、交流していました。会場のおとなたちは子どもたちを「ようこそ！」と拍手と笑顔でお迎えました。「はじめまして」の瞬間は、おとなも少々緊張さみ。

そんな時は、児童館の得意技・あそびの出番です！身体を動かしながら、魔法の呪文を唱えると、あら不思議。おとなも子どももあつという間に、すっかり表情がほぐれていました。



【おとなの考え×子どもの声「これ、いいね！】

いよいよ子どもたちが各グループに加わり、おとなと子どもが一緒になって『居心地のいい場所』を考えます。各テーブルに集まった全国各地の『いいところ』を、改めて子どもたちにも紹介しました。「これ、いいね！」「こんなことやってみたい」という情報には、子どもも一緒に「いいね！」シールを貼りました。おとなの思う「いいね！」と、子どもの「いいね！」の違いも見えるようになりました。



これまでおとなが考えてきたことに、子どもの声をかけ合わせることができ、子どもが考え、想い、願う『とびきり居心地のいい場所』を、たっぴり一緒に考え、おとなと子ども、それぞれの思いを時間いっぱい語り合いました。



【とびきり居心地いい場所へ！】

おとなと子ども ごちゃまぜトーク

「終わりの会で騒がしい子にどうしたら静かにしてもらえるかなあ？」と悩みを相談すると、「注意すると逆効果。(先生と) 仲いいから静かになる」、「おとなしめの先生でも自分のキャラを分かりやすく、いいところをアピールしてくれる人は好き。他の先生を陰で愚痴る人は好きになれない」と、子どもたちから素直なアドバイス。また一方では「将来、バスケットボールのプロ選手になりたい。児童館のバスケットゴールに網がないのでつけてほしいな」という子どもの声に真剣に耳を傾けるおとなたち。会場のあちらこちらが、まるで小さな児童館のようでした。



「いろんな児童館のいいところ、マネしたいことがいっぱいあった。児童館ってまだまだ何でもできる！」と、児童館の可能性に気付いた人。「子どもたちと気軽に話せてよかった。もっと腹を割って話し合いたい」と、子どもに寄り添い、子どもの声・心を大切にしようと思いついた人。それぞれにたくさんの気づきがありました。けれど何より、おとなも子どもも「ぼくらの児童館のいいところを増やして、もっと居心地のいい場所にしたい」という思いがあふれていて、この分科会そのものが、笑顔のあふれるとても居心地いい場所になりました。

まとめ

最後に、子どもたちへ「みんなの周りには自分の思いや提案を受け止めてくれる人がたくさんいます。楽しい提案から、困ったときの相談まで、友だち、おうちの人、児童館・クラブの先生、学校の先生…いろんな人に伝えてみてほしいなと思います。話を聞いてくれて、一緒になって考えてくれる仲間が身近にいます。これからも、児童館・児童クラブがみんなの居心地のいい場所になるように一緒に協力していきましょう」とメッセージが送られ、また、おとなへは「これから、それぞれの児童館・児童クラブに帰って、子どもたちといっぱい話しましょう！全国各地に「とびきり居心地のいい場所」をいっぱい作りましょう！子どもたちと一緒に取り組むなかで、課題が生まれることもあるかもしれませんが、困ったときは、全国の仲間と集った今日のことを思い出してほしい」と、メッセージが送られました。

参加者数

62名

参加者の声

- ・子どもたちの生の声が聴けて、大変インパクトがあった。声には出さなくても色々と思ったり考えたりしているのを知って勉強になった。寄り添うことの大切さ、子ども

の心を大切にしていくなぎさがあり、実践に向けての一步にしていきたい。子どもたちの声はとても大切。

- ・子どもを交えて、とても刺激になり勉強になった。
- ・おやつとか食べられて気軽に話せてよかった。もっと児童館がよくなればいいなと思いました。(小学生)
- ・児童館ツアーも楽しかった。ぼくらの児童館でたくさんいい所を増やしていきたいと、今日の話し合いで思いました。他の児童館のいい所もたくさん見つけることができ、そしてとても勉強になりました。(小学生)
- ・大人の意見が聞けてよかった。話し合いの場があって自分の意見も言えたので嬉しかったです。こういう会があると児童館がよりよくなると思いました。(中学生)
- ・それぞれの児童館に特色や差があって驚いた。おとなも接し方など、自分たちと共通する悩みがあると感じた。(高校生)



担当者から

関西A会場のPRESSは中学生フォトグラファー！分科会後半の各グループの様子をカメラに収め、全員での集合写真の撮影も。どのアングルも素敵でしょ♡

分科会では、実践写真やおたよりを駆使して解りやすく紹介して下さったみなさん。まさに「思いを形にする力がすごい」みなさんの底力と情熱を強く感じました。

ごちゃまぜトークでは、「もう会わん人やから本音話せた」子どもの声にハッと。よく知っているからこそ言いつらい…とびきりの居心地に向けて、探求です。

紅葉の京都、『とびきり居心地のいい場所』を目指して。分科会も「みんなが居心地よく！」と心掛けました。「行ってもいいよ！」と快諾してくれた子どもたち、送り出してくださった保護者の方々、京都会場で出会えたみなさんに、心より感謝いたします。

企画運営委員

- ・忌部 智子 (福井県越前町朝日児童センター)
- ・勝守 昭子 (京都市桂徳児童館)
- ・金森 美奈実 (京都市嵯峨野児童館)
- ・設楽 秀子 (長野県松本市中山児童センター)
- ・清水 将光 (京都市修徳児童館)
- ・長谷川 陽子 (三重県四日市市こども子育て交流プラザ)
- ・比嘉 将吾 (京都市御室児童館)
- ・溝口 晋太郎 (たかつかさ児童館 京都市)



第6分科会

+あそび (あそびたしざん)

どんな課題にもあそびを“たしざん”することで、児童館はますます魅力的なものになる！第6分科会では、「みんなの課題（こまった）にあそびを足して、おもしろい事業にしてみよう！」を目指し、われらの得意分野「あそび」を生かして地域課題や子どもの課題にアプローチするべく、どんどん喋ってどんどん聴いて、新たな発見をするグループワークを実施しました。

分科会内容

【おもしろ履歴書で自己紹介】

各自が書いてきた『おもしろ履歴書』を持ち寄り、自己紹介！アイスブレイク&グループメンバーのことを知る時間となりました！集まった『おもしろ履歴書』はGoogleドライブで共有して、他参加者分についても、知ることができるようにしました！！

おもしろ履歴書

記載日： _____

※記入できるところだけで大丈夫です。

◎は当日の自己紹介で発表してもらいます。ご自身でもう1か所◎をつけてください。

(ふりがな) 名前	あそび たしざん 佐々木 司	出身地	北海道札幌
今日、呼んでほしい名前	つつか、つかさ、うしくん	星座	動物占いなど

好きな◎	好きな食べ物 ウニ・カニ・たちポン・生ガ
◎してみたい！ ◎にもりたい！ ◎がほしい！	米倉涼子みたいなビジュアルになって「私、失敗しない行事の前に言ってみたいものです。
あったらいいな こんな児童館 (児童クラブ)	何を言ってもだれかがちゃんと話を聞いてくれる♪

【グループワーク①～なまえのないあそび～】

子どもの頃は、だれもが面白くない時間に遊びを加えることで面白い時間に変化させる天才だったはず。大切なのは「今を楽しむ力」です。児童館・放課後児童クラブの職員には大人になってもそんな感覚が必要です。

そこでグループごとでそんな「なまえのないあそび」を思い出すところからスタートしました。

学校からの帰り道では

○白線だけを通して帰った

○同じ石を家まで蹴って帰る

○川に葉っぱを流して、おいかける などなど

おもわずやったやったと共感するエピソードがたくさん出ていました。

【グループワーク②課題にあそびたしざん (事例紹介)】

地域課題や子どもの課題に遊びをたしざん。

◆ (さぬき 尾松さんから事例紹介)

「お箸の正しい使い方を知ってほしい！」「でも“教育”的な要素は減らしたい」の課題に「豆つかみをパールはこびにする」をたしざん。キラキラとワクワク感を+。

◆ (札幌 荒木さんから事例紹介)

「素直な気持ちが伝えられない子」の課題に絵本「大ピンチ図鑑」をたしざん。今のピンチ度を★の数で表すことで、できごとや気持ちを表すコミュニケーションツールにする。

◆ (グループで事例紹介)

自分が課題に感じていることを書き出し、各自遊びをたしざんしてみる。

あそび たしざん / ー

① 課題 (マナビにつながる材料)

② 子どもが好きなこと (遊び要素材料)

お箸で食べものを刺したり、持ち方のせいでこぼしたりー
お箸の正しい使い方を
知ってほしい！

・観うこと (誰かと、自分の記録と)
・キラキラ

③ 課題タイトル

④ ねらい (テーマ)・対象

パールはこび

誰でもできる
何度でもやりたくなる



【グループワーク③～レッツクッキング～】

いくらきれいな料理でも、子どもがおいしそうと感じないと食べてもらえません。「課題」に「遊び」を加えることをクッキングにたとえて、参加者自身が普段仕事で感じている課題にどのように遊びを加えて、おいしく（子どもが食べやすく）調理するかを考えました。

- ・かたづけができない
- ・子どもたちの言い合いやけんか
- ・言葉づかい

普段の関わりの中でどのようにアプローチしていくのがいいか、悩みは尽きません。

その後、各グループで事例の一つを選び、よりおいしく、より子どもたちが「たべたい」と感じるためにどうすればよいか、名料理人が集まって調理し、いくつかの班に紹介していただきました。

どんなアプローチも、子どもに伝わらないと自己満足になってしまいます。児童館・放課後児童クラブは「あそびを通じた健全育成の場」です。いつも「あそびをたしざんすること」を大切にしたいですね。

ご参加していただいた皆様。ありがとうございました。



参加者数

87名（ゲスト4名企画運営委員6名含む）

参加者の声

- ・おもしろ履歴書は、アイスブレイクにとっても面白い取り組みだと感じました。書いていた時は、改めて「自分は何を提供できるのか」を見つめなおせました。
- ・あそびの足し算、とても面白かったです！
自館でも取り入れて、職員とアイデアを出し合ってみます
- ・同じものでも角度を変えると見方も感じ方も違うもの、やり方次第、工夫そのもので楽しさ倍増、「まじめにふざける」を…これからも子どもたちと共に、共有しながら繋げていきたいと思いました

担当者から

- ・分科会を作るまでの過程が楽しく勉強になりました。大会は対面で全国の皆さんの熱気を感じることができて幸せでした！遊び+最高！（荒木）
- ・違う地域のメンバーが企画委員となり、準備から全国大会気分です（笑）、当日はたくさんの方と交流できました。私たちの強み『遊び+』を掲げていきましょう！（佐々木）
- ・オンライン&デジタルの数年を経て、改めてオフライン&アナログの喜びを感じた時間でした。子どもと一緒に“おもしろがれる大人”が増えたらいいな（尾松）
- ・いままでもこれからも児童館・児童クラブが子どもたちがおもしろいと感じる色んなきっかけをつくれますように（金坂）
- ・久しぶりの全国大会の参加、初めての企画運営委員でしたが、たくさんの方と繋がることができました。前日、交流会、打ち上げの3日連続の企画運営委員メンバーとの夜ご飯も楽しかったです。（井上）
- ・北海道、香川、神戸の多国籍編成での企画運営委員、サイコーでした！分科会、やってよかった！（大角）

担当者名

- ・荒木 聡子（札幌市山鼻児童会館）
- ・佐々木 司（札幌市菊水元町児童会館）
- ・尾松 佳織（香川県さぬきこどもの国）
- ・金坂 尚人（神戸市六甲道児童館）
- ・井上 利恵子（神戸市立児童センターこべっこランド）
- ・大角 玲子（神戸市立児童センターこべっこランド）



分科会全体集合写真等



企画運営委員集合写真

第7分科会

こどもまんなか社会の『切り札』こそ児童館!! 子どもの居場所を再考する

これまで、児童館はその時代の様々な社会的課題に真正面から向き合ってきました。『こどもまんなか社会』といわれる今、改めて社会に発信する必要があると思います。私たちに何ができるのでしょうか？こたえが1つではなくなった現在、お互いの思いを尊重しながら、児童館の『切り札』を再考しました。

分科会内容

こども家庭庁が目指す『こどもまんなか社会』実現に向けて、何が私たちの『切り札』となり得るのかを、グループワークを通じて考えました。

【アイスブレイク】

愛媛県の特産品と言えば「みかん」。[みかん]にもたくさん種類があります。参加者の緊張をほぐすためグループ分けのアイスブレイクとして、愛媛県産柑橘ジュースの銘柄当てゲームを行いました。名札と一緒に配布した柑橘ジュースと同じだと思う大瓶ジュースのテーブルに座ってもらいました。参加者の中には愛媛県出身者もいましたが、地元の間でも正解するのは難しかったようです。参加者と企画運営委員合わせて34名中正解者は2名だけでした。その後、全員で「乾杯!!」を行いました。

おかげで参加者同士の会話が弾み、和やかな雰囲気の中グループワークに入ることができました。



【グループワーク①】

自己紹介の後、1つ目のグループワークは、自分の思う施設の長所や特色を『切り札』と捉え、1人3枚の『切り札』カードに記入し、グループ内で紹介していききました。自分自身の長所、施設の特徴、地域とのつながり、興味があって続けていることなど、参加者それぞれの『切り札』を共有することができました。ファシリテーターとして企画運営委員がグループ内の会話を円滑にまとめていたため、参加者一人一人の考えを引き出すことができていました。誰かの『切り札』が自分の新しい『切り札』の気付きのきっかけになったのではないかと思います。



【グループワーク②】

休憩をはさみ、1つ目のグループワークを基に、『こどもまんなか社会』実現のため、こども家庭庁が取り組みを進めている分野のテーマ（ヤングケアラー、子どもの自殺対策、子どもの声を聴く、子ども若者育成支援、少子化対策、子どもの安全）をカプセルに入れ、ガチャガチャマシンで抽選しました。結果、テーマは『子どもの声を聴く』に決定し、各グループで『切り札』とするための条件を出し合いました。付箋に書き出していく中で、カテゴリごとに分けたり、ひたすら条件を書き出していったりと手法は様々でしたが、グループごとで工夫をしながら議論している様子が見られました。

また、グループワーク①で話した自分たちの思う『切り札』も活用しながら、話し合いを進めていきました。グループでの議論が白熱し、時間が足りないように感じましたが、発表に向けて全員で考えをまとめていきました。





【グループ発表】

各グループ話し合った内容を2分にまとめて発表する予定でしたが、想いが強すぎてどのグループも時間内には収まりきれない様子でした。

『子どもの声を聴く』ためには何が必要か？という問いに対して、「まずは児童館に来てもらうことが大事、SNS等を利用し外に向けての発信、それに合わせて環境設定も必要」というプロモーションの観点から切り込むグループもあれば、「子どもたちに話をしてもらうためには職員の弱みや隙を見せ、同じ目線になることが必要」といったスタッフの資質から切り込むグループ、また行政との連携を視野に入れた発表等もあり6グループがそれぞれの考えを発表してくれました。



【まとめ】

『こどもまんなか社会』実現のため『子どもの声を聴く』ということ『切り札』にするために、どのようなことが必要か各グループで様々な切り口から考えを導き出してきました。ただ、こたえが1つでなくなった現在、うまくいく場合もあれば、そうでない可能性もあります。しかしながら、私たち児童厚生員はもちろんのこと、子どもに携わる大人たちが、『こどもまんなか社会』と向き合い、子どもに寄り添いながら子どもの声を聴き、できる事から始めていく。そして、それを継続しながら、時代とともに変わる新しい課題について考え続ける事が、『切り札』のひとつとなるのではないかと思います。

参加者数

参加者29名・行政関係者2名・報道関係者1名

参加者の声

- ・グループ分けの時点から児童厚生員ならではの楽しい仕掛けがあり、たくさんの人とコミュニケーションを取ることができました。子どもの声を聴くために児童館職員として何ができるかをみんなで考え、いろんな視点の意見を聴くことができ、勉強になったのでもう少し時間が欲しいと思いました。
 - ・時間も適切で、ファシリテーターの方も上手く、活発な意見交換が出来ました。
 - ・『切り札』カードを上手く使うことで、話が出やすくなって良かったと思います。子どもの声を聴くために私たちが出来ること、遊びを通して子どもの様子をよく見て感じて、その先に繋げられるようになりたいと思いました。
- また、グループワークでは「遊び心」もあって空気も和み勉強になりました。



担当者から

今年度からこども家庭庁が発足し、『こどもまんなか社会』実現という大きな目標が掲げられる中での分科会開催となりました。限られた時間の中で、どのような分科会のプログラムを実施すれば良いか、どのようなキーワードが参加者に響くのかを考えるのは大変でした。また、この分科会が最初はどうなることかと思いましたが、企画運営委員の打ち合わせを積み重ねることで、今回の分科会を開催することができました。

当日は、柑橘ジュースの銘柄を当てるグループ分けアイスブレイクを行い、お互いの緊張をほぐすことから始めました。担当者自身の体感としてグループワークが始まってから終了するまで、あっという間の出来事だったように思います。参加された皆さんの『切り札』は、多種多様な楽しい情報交換の場となりました。『こどもまんなか社会』実現のための『切り札』になるヒントをこの分科会で見つけていただけたと思います。

担当者名

- ・大野 瑞季（えひめこどもの城）
- ・古澤 智（えひめこどもの城）
- ・溝田 翔一（えひめこどもの城）
- ・山下 洋一郎（愛媛県松山市中央児童センター）
- ・多賀 千晶（愛媛県松山市中央児童センター）
- ・田中 基行（愛媛県松山市南部児童センター）
- ・山下 順平（愛媛県松山市南部児童センター）
- ・黒田 泰士（愛媛県松山市北条児童センター）
- ・柚山 佳子（愛媛県松山市新玉児童館）
- ・石丸 真理子（愛媛県松山市味生児童館）
- ・井上 伊都美（愛媛県松山市久米児童館）
- ・藤原 伊津子（愛媛県松山市久枝児童館）
- ・森田 洋喜（愛媛県松山市畑寺児童館）
- ・山崎 帆乃花（愛媛県八幡市保内児童センター「だんだん」）
- ・白川 裕介（愛媛県東温市よしいのこども館）
- ・白川 凜太郎（愛媛県久万高原町NIKONIKO館）
- ・根岸 奈緒子（愛媛県砥部町麻生児童館）
- ・緒方 佑次（愛媛県内子町五十崎児童館）



分科会PR動画



第8分科会

あそびplus福祉

児童館の窓口はあそび。あそびを通じた関係作りから福祉的支援に繋げるコツって？

あそびって、子どもにとって日常のしあわせ。何気ない子どもの行動や言動、表情、友だちとの関わりなど「変化」や「課題」に気づき、どのような視点（まなざし）から次の支援に繋げていますか。参加者一人ひとりが考える「あそびplus福祉」について話題をシェアして、多様な視点で子ども理解を深めるためのヒントを探求し、児童館の可能性を追及します！！

分科会内容

【分科会コンセプト】

「福祉的支援へつなげるには」という点から始まった企画作り。しかし、議論を続けるなかで、「遊びで信頼関係を築かないと課題は発見できないよね。」ということに気づき、「福祉＝幸せなだから、子どもの幸せとしての遊びを捉え直すことで福祉につなげよう！」というコンセプトが生まれました。

【あそびアンケートから見た子どもの声・大人の声】

まず子どもと保護者へ実施した遊びについてのアンケート、児童厚生員に対して実施した福祉的課題についてのアンケートを報告しました。

子どものアンケートの集計からは、施設があるから出来る遊び、児童館職員とやりたい遊び、遊びで困った時の質問に、本当に多様な意見が出てきたことを説明。保護者の期待する遊びも、家庭ではできないものや、友達と、主体的で身体を動かすといった遊びを期待していることがわかりました。児童館職員のアンケートは、児童館にとって対応が難しい課題が多く、つなぐことを重視する必要性を感じました。



【子どもの喜び、心の動きを感じたエピソード】

ここから、グループワークで「子どもの遊びの喜び」について考えを深めてもらうため、参加者に事前に呼びかけて持参してもらった「子どもの喜び・心の動きを感じた写真」を見せ合い、それを感じたエピソードを紹介してもらうことを、アイスブレイクとして実施しました。

事前の案内でイメージが伝わりづらかったようで、グループによっては行事や活動紹介になってしまう場面もありましたが、ファシリテーターの工夫で、子どもの背中を見つめる職員の視点が感じられる話も共有され、グループごとに和やかな雰囲気になりました。



【私たち支援者の感情が揺れるのはどんなとき？】

「福祉は幸せ」という言葉の意味を考えるため、子どもの感情を見取る職員自身が、趣味、仕事、地域活動など、日常の中で感情が揺れ、喜びを感じることについての語り合いから、自身が何を求めているのかを深めてもらえたらと考え、話をしてもらいました。

グループでは、ドライブや食事が好きな理由や、仕事の息抜きの喜び、仕事のなかでの喜びなど、職員それぞれの感情が揺れる場面についての語りが始まり、声も大きく、もう少しテーブルを離しておけばと思うほど盛り上がりました。子どもの喜びとして遊びを考えるには、職員の私たちが感動する心、情操を豊かに暮らすことが大切だと思い、参加者自身の気持ちをワークの中に取り入れましたが、とても良い場になりました。





【子どもを中心に遊びを見直してみる】

職員の感情の揺れ、喜びを感じる点がバラバラのように、子どもの感情の揺れの多様性を踏まえて、もう一度遊びを見直すために、改めてグループで話し合ってもらいました。話し合いの過程を残すために、テーブルごとに模造紙に議論を書き残してもらいましたが、様々なコメントが書き込まれていました。



【児童館・児童クラブの想い～my message～】

分科会の最後に、「あそび+福祉」についての一言メッセージを書き出してもらい、全員で円になり、お名前と合わせてメッセージを読み上げてもらい、全員で共有しました。その際の内容は、下記のQRコードから紹介いたします。

子どもの遊びは福祉そのもの。
子どもと信頼関係を結ぶ大切な関わりとして遊びを捉え、行事や日々の関わりを検証することが、課題を見つける力になります。この分科会が、そのためのきっかけになればと願っています。

↓こちらから↓



参加者数

56名

参加者の声

- ・一番は、安心して遊べる居場所にする事ではありませんが、様々な子どもたちの中には、遊びを通して見えてくる課題、子ども達の抱えているSOSなどを感じる事ができるのも児童館ならではの感覚だと思います。子どもたちが本当に主体的に活動できる、活動したいと思える児童館のあり方を今一度考えて行きたいと思いました。分科会での様々な意見、話が聞けて良かった。貴重な時間でした。
- ・子どもにとって遊びは楽しい、遊びの場で仕事をしている私たち、子どもたちと遊びを通してコミュニケーションをとり、遊びを通して大人を見ている子どもたち、そこから信頼関係を築き、「また明日も遊びにおいでね」との声掛け、翌日「ただいま」との声が聞こえる居場所。とても大切な場所。他市町村や県外からの参加もあり、改めてこの仕事の大切さ、役割等を考え直す良い機会となりました。課題が沢山あるのは現状ですが、自分自身が楽しく仕事をする事で子どもが楽しく過ごせる事を第一に考え、これからも子どもたちと関わっていきたいと思います。



担当者から

沖縄県内の参加者が大半の中、県外の方々の参加があり、全国大会だからこそできる仲間の出会いの場ができたことは、企画運営に携わって本当に良かったなあと感じました。

始めに紹介した「分科会のコンセプト」について、もう少し具体的に趣旨を解説できたら、テーマに掲げている「あそびplus福祉」である‘あそび’を通じた信頼関係から繋がるソーシャルワークスキルの必要性を、より深めることができたかなと会場の様子を見て感じました。よって、ぜひこの報告書を通して参加者の皆さんには、振り返りをさせていただきたいと思います。

その中でも参加者の皆さんは、想いがある方々でしたので、子どもたちの可能性について‘ゆんたく=おしゃべり’で会場を盛り上げて頂き、最後の「my message」をお聞きした際には、児童館や児童クラブの子どもや保護者の皆さんへの愛あるmessageを感じることができました。あらためて子どもの育ちには、児童館・児童クラブの重要性と可能性を強く感じました。

第8分科会沖縄会場にご参加の皆さん、たくさんゆんたくして、想いをシェアして下さい、ありがとうございました。

担当者名

- ・安次富 美和 (沖縄県沖縄市宮里児童センター)
- ・大山 真紀 (沖縄県那覇市くもじ・にじいろ館)
- ・新城 宗史 (沖縄県宮古島市ひらら児童館)
- ・玉城 清香 (沖縄県北中城村仲順児童館)
- ・当山 彩子 (沖縄県那覇市若狭児童館)
- ・仲本 悦子 (沖縄県宜野湾市新城児童センター)
- ・長若 道代 (沖縄県那覇市ゆうゆう児童クラブ)
- ・山崎 新 (沖縄県那覇市国場児童館)
- ・山城 康代 (沖縄県うるま市みどり町児童センター)



報告書「視察研修 エンディング」

各会場のリレー中継

7つの会場をzoomでつなぎ、各分科会担当者から会の様子、話し合った内容、検討結果等について報告がありました。どの分科会も、「こどもまんなか社会」の実現に向けて、これからの児童館のあり方やあるべき姿、「子どもの居場所」や「子どもの声を聴く」ことについて活発な議論が交わされたことが報告されました。



全国発議「こどもDoまんなか宣言」

本大会における全国発議として、全国児童厚生員研究協議会 木戸玲子会長より「こどもDoまんなか宣言」が発議されました。木戸会長は「児童館は、これまでもこどもを心のまんなかに据えて汗をかき、涙をし、そして笑い合ってきた。しかし「こどもまんなか社会」をリードしていく大人として、どの子にも同じようにある「権利」を守るべき存在であり、大人の力を振りかざしたり、大人の都合が良いように子どもに接することや、扱うことは決してあってはならない。様々な状況に置かれた子ども一人ひとりの声にならない声、声に出さない思いや意見に耳を傾け、心を寄せて子どもが安心できる居場所であり続ける」と述べ、参加者同意のもと宣言しました。



第18回全国児童館・児童クラブ大会「全国発議」

こどもDoまんなか宣言

「私たちは、児童館・児童クラブがこれまで地域のこどもの居場所として社会的な役割を果たしてきたことを自負するとともに、「こどもまんなか社会」の実現に向けて、これからもさらにこどもが安全に身を置ける場、安心できる心の拠り所として、こどもの声や気持ちを受け止め、こどもの最善の利益の優先を考慮し、地域社会の期待や保護者の負託に応えていくことを宣言します。」

令和5年11月25日



全国児童厚生員研究協議会
第18回全国児童館・児童クラブ大会参加者一同



次回大会の発表

全国児童厚生員研究協議会から、今回の開催地は「愛媛県」との発表がありました。今回の分科会会場にもなっている四国会場と中継をつなぎ、愛媛県の企画運営委員から全国の参加者に向けて「愛媛からReスタート！！オールえひめでお待ちしています！みなさん、次は愛媛県で会いましょう！」と熱いメッセージをいただきました。



- ・ 次回開催地 愛媛県
- ・ 開催日 令和7年(2025年)2月15日(土)・16日(日)

閉会宣言 敷村一元 (全国児童館連絡協議会 会長)

皆さんお疲れ様でした。平成30年ふくい大会のあと、昨年度はオンラインでみやぎ大会があり、今回は久しぶりに集まって開催する全国大会でした。

時間が足りないな、もう少し話をしたいな、という声が聞こえてきましたが、そのとおりだと思いますし、みんなで集まるということが改めて大事なんだと感じました。今回は全国7カ所で行い、それぞれが本当に盛り上がっていました。次はみんなで集まろうではないかということで、次回は愛媛県、みんなで集まって大会を盛り上げたいと思っています。



そしてもう一つ、愛媛開催のあとは毎年全国のどこかで開催したいと思っています。全国大会をこれからもさらに盛り上げていきたいと思いますので、皆さんよろしくお願いいたします。ありがとうございました。





【北海道会場 石狩市子ども未来館あいぽーと】（参加者25名）

2日目エクスカージョンとして石狩市大型児童センター子ども未来館あいぽーとに行きました。

前半は、「利用者の願いが叶う児童センター」「0歳から18歳までの居場所作り」という施設の思いについて大会にも参加いただいた伊藤美由紀館長からお話しいただいた後、利用者の活動場所や制作物、掲示物など施設内を自由に見学しました。



今日の社会課題を解決するたくさんのヒントを得た会となりました。

後半は、参加者で輪になって施設内の感想や深掘りしたいことを聞きました。異年齢を対象とした事業や次世代育成事業、施設としての子どもの権利についての説明責任など





【東京会場1】（世田谷区立希望丘青少年交流センター アップス）（参加者8名）

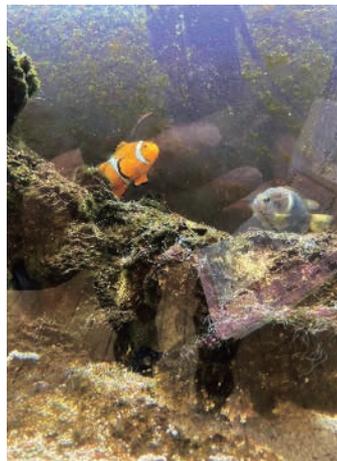
希望丘青少年交流センター「アップス」の視察には8名が参加。施設概要を説明した後、館内をゆっくりと見学していただきました。その後、匿名で意見表明ができる「アップスにひとこと」、意見表明しやすい環境づくりに腐心している「J-meeting（若者運営委員会）」、若者の「やってみたい」を予算的にも助成する「チャレンジ・アクション」など、意見表明に関わる取り組みを中心に、事業説明をしました。



その後の質疑応答・意見交換では、若者の主体性を大切にした伴走支援、職員の資質向上の取り組み、居場所づくり（福祉的取り組み）と若者の主体的活動の活性化（社会教育的取り組み）とのバランスなどについて話し合いました。

【東京会場2】（港区立港南子ども中高生プラザ）（参加者14名）

館内を見学しながら質疑応答をさせていただきました。中高生が日常的に過ごしている体育館、音楽スタジオ、ダンススタジオ等を案内しました。何より学童クラブの定員が320名で、ひとつの施設内に5クラスあることに皆さん驚かれていた印象でした。



短い時間でしたが、ゆっくりと見学することができました。

海洋大学の方々と育っています。

【東京会場3】（港区立高輪子ども中高生プラザ TAP）（参加者11名）

港区の児童館、放課後児童対策を簡略にお伝えした後、区の施策から「中高生プラザ（中高生対応館）」に求められていることを説明しました。

その後、各フロアの特徴、前述の施策への対応・取り組みを話しながら、随時質疑応答の時間を設けつつ館内見学を行い、その後、地域との関係性・連携の変化、当館の長所、課題等をお伝えし、質疑応答の時間としました。

質問には、具体的なフロアの活用方法、放課後児童クラブの運営について、中高生世代へのPRはどうしているのか、などがありました。

皆様との会話・質疑応答を通して、改めて大型館の特徴（充実した施設等）を活かしつつ、地域と連携し、こどもまんなかの児童館をつかっていきたい、と強く思いました。

見学者のみなさまには、悪天候の中ご来館いただき改めて感謝いたします。



【東京会場4】（港区立麻布子ども中高生プラザ）（参加者11名）

施設長の翠尾館長から施設概要、利用者状況、事業運営のポイントや主な事業等について概要説明を受けた後、施設見学を行いました。施設には子育てひろば、遊戯室、学童クラブ室、学習室、音楽室のほか、陶芸窯を備えた創作活動室、広いスペースで多様な活動ができるアリーナがあり、乳幼児と保護者、小学生さらには中高生と幅広い世代が利用することができる環境を確認しました。



また、各部屋や通路の掲示板には、イベント告知の手作りポスターや子どもたちが制作した作品をはじめ、利用者が地域の情報を共有できる「ちいきMAP」、子どもたちが楽しい！おもしろい！を考える「AZABUプロジェクトX」などが掲示



されています。職員が子どもたちや地域の方々と一体になって利用しやすい施設環境づくりに努めている様子を見ることができました。

地域との関わりを大事にしながら子どもの視点を大切にした施設づくり、中高生利用の促進など参考になるところが多く、学びの多い実りある視察研修となりました。



【東京会場5】（町田市子どもセンターまあち）（参加者10名）

最初に、町田市の子どもの居場所づくりや参画事業を中心とした子ども施策についての報告を聞き、その後館内の見学と情報交換会を行いました。

館内見学では、スタジオや体育館、キッチン等の中高校生にも対応した設備を子どもたちが自由に使える様にとっても興味を持っていただきました。

また、大の大人が「おもちゃの貸し出しカウンター」前を陣取って、職員に運用方法を聞いたり、各々のやり方について情報共有したりするなど子どもそっちのけでとても盛り上がりました。

後半の意見交換会では、分科会のテーマである「子どもの声を聴く」ことについての意見交換が熱を帯びました。

また、民間の児童館が行政と連携するためのコツや予算などのちょっとデリケートな質問もあがりました。



【関西A会場】（おとなの遠足～サイコロの旅）（参加者16名）

「せっかく京都に来たんだから仲間たちと旅をしてみよう」とサイコロツアーを企画、選りすぐりの京都観光12コースを会場に掲示してアピールしました。ツアー当日、朝10時に京都駅に集合、3つのチームに分かれて、「たかつかさ児童館コース」、「南禅寺コース」、「新京極コース」へと元気よく出発しました。各コースには独自のミッションが割り当てられていて、それをクリアしたら、サイコロを振り、次のミッションを行うというルール。途中、オープンチャット内に指令が出され、ツアーの様子をアップしたり、参加者の笑顔と京都の紅葉や美味しい写真を共有しながらのツアーとなりました。全国大会で出会った仲間たちと過ごした楽しい時間は、現場での頑張る力になりました。そして、「次は愛媛で会おう」を合言葉に帰路に着きました。



【関西B会場】（参加者37名）

神戸市灘区大和公園にて「どんぐりマーケット」を開催。工作物をどんぐりや木の实のお金で購入する、お買い物ごっこプログラムです。イベント参加者770名、出店数36店、というビッグイベントでした。全国大会の参加者は、どんぐりや木の实を拾って参加し、お買い物を楽しまれたり、工作物を持ってきてお店屋さんをしていただいた方もおられました。あそびながら様々な学びを感じている様子を見て、あそびのたしざんを実感していただけたと感じています。



【四国会場】（参加者8名）

えひめこどもの城において、4年ぶりに県内の児童館が一堂に会するイベント『えひめ児童館ジャンボリー』を見学してもらいました。開始時刻の10:30には大変多くの来園者でにぎわい、県内児童厚生員のやる気も相まって、児童館内はいつもとは違う熱気に包まれていました。各児童館の趣向を凝らした遊びコーナーや公演プログラムもあり、演劇やフラダンスなど、子どもたちが大きな会場で発表をする機会にもなりました。



視察見学をいただいたみなさんからは、「他県・他館の取組など非常に参考になった」、「来園



して本当に良かった。」など、県内児童館職員との交流やモチベーションアップという部分でも大きな意義がありました。



メディア掲載

2023年(令和5年)11月26日(日曜日)



児童館や児童クラブの運営や役割などを話し合った大会



子どもの主体性育んで

札幌で「児童館大会」 全国の事例紹介

全国の児童館や児童クラブの関係者が集まる「全国児童館・児童クラブ大会」が25日、札幌市などで開幕した。市中央区の中島児童会館では、子どもの意見をとり入れた施設の運営方法などがテーマの分科会が開かれた。

全国児童厚生員研究協議会などの主催で、東京都や京都市など全国7カ所で分科会を開いた。札幌では職員約50人が参加した。札幌会場の分科会で、菊

水やよい児童会館の松尾知実館長は、子どもが主体となって折り紙コンテストを企画した事例を紹介。松尾さんは「受け身だった子どもたちが、やりたいことを周囲に手伝ってもらったり、自ら企画したりするようになった」と話した。

札幌ではこのほか、10代の居場所づくりもテーマに取り上げた。26日には、石狩市の児童センター「こども未来館あいぽーと」を視察する。(伊藤友佳子)

北海道新聞

北海道新聞 令和5年11月26日付



子どもが安心できる居場所づくりに
ついて話し合う参加者

子どもの居場所再考

全国7地区 児童館・クラブ大会 オンライン

第18回全国児童館・児童クラブ大会(児童健全育成推進財団など主催)が25日、東京を主会場に愛媛など全国7地区をオンラインでつないで開かれ、児童館や児童クラブの職員らが、子どもが安心して居る居場所づくりに向けて各地の現状などを共有した。

東京会場でのシンポジウム後、各地区で分科会を開催した。四国会場の松山市若草町の市ハーモニープラザでは「こどもまんなか社会の『切り札』こそ児童館く子どもの居場所を再考する」をテーマ

【紙面編集】織田みきわ
2025年2月開催の次回全国大会は松山市が主会場になる。(河野茜)

愛媛新聞 令和5年11月26日付

実行委員・企画運営運営名簿

第18回全国児童館・児童クラブ大会

大会実行委員

	名 前	所 属
実行委員長	木戸 玲子	全国児童厚生員研究協議会 会長
副実行委員長	井垣 利朗	全国児童厚生員研究協議会 副会長
副実行委員長	敷村 一元	全国児童館連絡協議会 会長
監事	齋藤 勇介	全国児童館連絡協議会 副会長
委員	岩 網 良	(一財) 児童健全育成推進財団 事業部 部長
委員	磯上 亜月子	(一財) 児童健全育成推進財団 総務部 課長補佐



企画運営委員

全国児童厚生員研究協議会の有志で構成されています。

北海道会場	名 前	所 属
1	高橋 雅裕	(公財) さっぽろ青少年女性活動協会
2	大久保 さくら	中標津町西児童館
3	小森 珠恵	(公財) さっぽろ青少年女性活動協会
4	三好 達也	札幌市栄通児童会館
5	山田 美奈	札幌市美しが丘児童会館

東京会場	名 前	所 属
1	井垣 利朗	八王子市川口子ども・若者育成支援センター
2	赤坂 由香里	目黒区平町児童館
3	志田 拓人	目黒区平町児童館
4	下村 一	世田谷区希望丘青少年交流センター「アップス」
5	橋本 聡司	港区高輪子ども中高生プラザ
6	深水 蒼	目黒区平町児童館
7	古郡 理恵	ポピンズエデュケア
8	水上 陸	町田市役所
9	水野 かおり	目黒区碑住区センター児童館
10	横江 卓	港区港南子ども中高生プラザ

北信越会場	名 前	所 属
1	梅田 広美	新潟県立こども自然王国
2	荒川 大靖	新潟医療福祉大学
3	上木 秀美	えひめこどもの城
4	上野 ひとみ	金沢市三和児童館
5	梅田 貴仁	新潟県立こども自然王国
6	中田 るり子	北名古屋市宇福寺児童館
7	宮崎 恭子	金沢市扇台児童館
8	迎田 洋路	新潟県立こども自然王国
9	中田 功大	新潟県立こども自然王国
10	田中 彩美	新潟県立こども自然王国
11	陶山 保奈美	新潟県立こども自然王国



関西 A 会場	名 前	所 属
1	清水 将光	京都市修徳児童館
2	忌部 智子	越前町朝日児童センター・朝日児童クラブ
3	設楽 秀子	松本市中山児童センター
4	長谷川 陽子	四日市市こども子育て交流プラザ
5	溝口 晋太郎	京都市たかつかさ児童館
6	勝守 昭子	京都市桂徳児童館
7	比嘉 将吾	京都市御室児童館
8	金森 美奈実	京都市嵯峨野児童館

関西 B 会場	名 前	所 属
1	大角 玲子	神戸市立児童センターこべっこランド
2	荒木 聡子	札幌市山鼻児童会館
3	井上 利恵子	神戸市立児童センターこべっこランド
4	尾松 佳織	さめきこどもの国
5	金坂 尚人	神戸市六甲道児童館
6	佐々木 司	札幌市菊水元町児童会館

四国会場	名 前	所 属
1	山下 洋一郎	松山市中央児童センター
2	石丸 真理子	松山市味生児童館
3	井上 伊都美	松山市久米児童館
4	大野 瑞季	えひめこどもの城
5	黒田 泰士	松山市北条児童センター
6	多賀 千晶	松山市中央児童センター
7	田中 基行	松山市南部児童センター
8	藤原 伊津子	松山市久枝児童館
9	古澤 智	えひめこどもの城
10	溝田 翔一	えひめこどもの城
11	森田 洋喜	松山市畑寺児童館
12	柚山 佳子	松山市新玉児童館
13	緒方 佑次	内子町五十崎児童館
14	白川 裕介	東温市よしいのこども館
15	白川 凜太郎	久万高原町 NIKONIKO 館
16	根岸 奈緒子	砥部町麻生児童館
17	山崎 帆乃花	八幡浜市立保内児童センター
18	山下 順平	松山市南部児童センター

沖縄会場	名 前	所 属
1	安次富 美和	沖縄市宮里児童センター
2	大山 真紀	那覇市くもじ・にじいろ館
3	新城 宗史	宮古島市ひらら児童館
4	玉城 清香	北中城町仲順児童館
5	当山 彩子	那覇市若狭児童館
6	仲本 悦子	宜野湾市新城児童センター
7	長若 道代	那覇市ゆうゆう児童クラブ支援員・非常勤講師
8	山崎 新	那覇市国場児童館
9	山城 康代	うるま市みどり町児童センター

第18回全国児童館・児童クラブ大会 報告書

令和6年3月31日発行

—— 【発行】 第18回全国児童館・児童クラブ大会実行委員会 ——

事務局

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-12-15 日本薬学会ビル7F
(一般財団法人児童健全育成推進財団内)

TEL : 03-3486-5141 <https://www.jidoukan.or.jp/>

「今までもこれからも こどもDoまんなか」

また次回大会でお会いしましょう！

北信越会場▶



◀北海道会場



▼関西A会場



▼関西B会場



▲東京会場

四国会場▶



◀沖縄会場



こども
まんなか

こども家庭庁
こどもまんなかマーク



じどうかん こどもDoまんなかキャンペーン
シンボルマーク



子ども虐待防止オレンジリボン運動